財団法人 日本ハンドボール協会編　平成23年11月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻523号　昭和40年6月7日第3種郵便物認可

ハンドボール

特集

第11回女子ジュニアアジア選手権
第40回全国中学校大会
第38回全国高等専門学校大会

11

NOV.2011・No.523

[表紙写真：第40回全国中学校大会男子優勝の平針中学・キャプテンの村瀬元基君：写真提供・スポーツイベント社]

財団法人 日本ハンドボール協会

http://www.handball.jp/

For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」
私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに
世界に類のない、ボールとスポーツエキップメント・メーカーとして
常に完璧な製品づくりを目指しています。

日本ハンドボール選手権構想

（財）日本ハンドボール協会 常務理事　江成 元伸

平成 21 年度に全日本社会人ハンドボール連盟（以下、社会人連盟）構想として立ち上げたプロジェクトは、平成 24 年度を完成年度として大会運営、組織的連盟活動を続けています。平成 22 年 4 月、社会人連盟が発足し、平成 23 年には、第 1 回社会人連盟理事会、第 1 回社会人ハンドボール選手権大会を開催するに至りました。社会人連盟の社会人委員会は全日本実業団ハンドボール連盟の組織活動を継続しており、新設したジャパンオープン委員会、全国クラブ委員会、都道府県委員会の活動に課題は残っていますが、社会人連盟組織としての陣容は整いつつあります。

社会人連盟を立ち上げた目的の一つに、登録区分を問わず都道府県所属チームの増加、都道府県大会がより活発化することがあげられていました。ハンドボール関係者の皆様方のお力添えを持って、中学、高校、大学の OB・OG を中心としたチームの立ち上げにご尽力いただくようお願いするところであります。

さて、社会人連盟構想と併せて検討しているプロジェクトに、日本ハンドボール選手権（以下、日本選手権）構想があります。毎年12月に開催されている全日本総合ハンドボール選手権大会は、当該年度の各加盟団体の優秀チームが一堂に会し、覇権を争います。参加チームは、日本リーグ、全日本学生連盟、ジャパンオープンの優秀チーム、そして日本ハンドボール協会（以下、日本協会）の推薦チームであり、カテゴリー別トーナメント型チャンピオンズカップです。（公財）日本体育協会が主催する国民体育大会もこの様式の大会ではありますが、成年、少年の区分された年齢別大会であります。チームの編成は単独チームの場合もありますし、選抜チームの場合もあります。これに対して、日本協会主催として、都道府県を代表する単独チームの優勝チームを競うトーナメントチャンピオンズカップを日本選手権と位置づけ、全国都道府県協会に所属する全チームが、都道府県選手権を予選として勝ち上がっていく大会を日本選手権と呼称し、全日本総合選手権に変わる大会として創設したいというのが日本選手権構想です。サッカーの天皇杯のように、一挙にプロチーム、JFL チーム、大学チーム、高校生チームが参加する大会に編成することは難しいと思いますが、まずは全国 47 都道府県選手権の優勝チームが参加する日本選手権を、早急に開催したいと計画しております。

理事会、評議員会、全国理事長会他で多くのご意見を頂戴しておりますが、併せて機関誌をごらんの皆様方のご意見も参考にさせていただければと期待しております。それらの意見を理事会等で議論し、すばらしい大会を作り上げていきたいと思っておりますので、皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

第11回
女子ジュニアアジア選手権
2012 世界選手権予選

第11回女子ジュニアアジア選手権総括

日本女子ジュニア代表監督　田中　茂

はじめに、今大会参加に当たり日本協会をはじめ、学生連盟、選手派遣にご協力いただきました各選手所属指導者、強化合宿中にも関わらずジュニア強化に協力いただきました日本代表女子スタッフ、選手、また多くの関係者の方々にご協力、ご尽力頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

第11回女子ジュニアアジア選手権が9月14日から20日までカザフスタン（アルマティー）で開催され、当初の予定ですと日本を含め9か国参加での大会でしたが、大会出発前日にマレーシアの不参加が決定し、23日までの大会開催期間が20日に変更され、大会は、8か国参加の、2グループ4チームのリーグ戦、その後、順位決定戦となりました。今大会は来年2012年、チェコで開催されます第18回女子ジュニア世界選手権予選でもあり、今大会での上位4か国が世界選手権出場を獲得します。

■大会に向けて

今大会を迎えるにあたり、国内選手選考合宿、強化合宿、事前強化合宿と選手を強化してきました。強化ポイントは簡潔に選手が理解できるポイントを中心に強化してまいりました。

1．DF（手を挙げ、足を動かし、声を出す）＋（9M内はハードDF）＋（インサイドDF）
2．FB（早考（判断）、早行（早い行動）、速攻（早く攻める））＋（速攻は縦にボールを早く運ぶ）
3．OF（ノーマークシュートを確実に入れる）＋（パス回しのボールスピードUP）

以上のポイントについて強化合宿で繰り返しスタッフから要求し練習をしてきました。また、国内での強化として、日本代表女子との攻防戦、ゲームと実践練習を行えた事も大会に向けてプラスになりました。またチーム形成の重要ポイントとして、選手同士の総合理解に時間を掛けミーティング、対戦国のビデオ分析を行い、大会に備えてきました。

カザフスタン入りし、3日間の事前練習を現地で行いましたが、環境の変化か食事の摂取に問題があったのか（水、食事に関しては十分気を付けていたのですが）、大会前に腹痛（下痢）、発熱を訴える選手が多く、試合に向けてのコンディション調整に頭を悩ませたのも事実です。

■予選リーグ

予選Aグループ「日本・カザフスタン・ウズベキスタン・チャイニーズ台北」
予選Bグループ「韓国・中国・イラン・チャイニーズ香港」

■チャイニーズ台北戦

日本　27（11－10・16－12）22　チャイニーズ台北

初戦と言う事もあり、立ち上がりは選手たちに多少の緊張感（国際試合初参加選手が多い）があり、チャイニーズ台北、日本ともにお互いペースを掴むことができない。前半、日本は6－0DFから速攻を中心に竹下、高宮の得点、セットOFでセンター一木、バックプレーヤーの渡辺を中心に得点を加算して行く。チャイニーズ台北は、セットでバックプレーヤー3人のコンビネーションプレーを中心に得点を上げ、前半は11対10の1点リードで折り返す。ハーフタイムで、DFから速攻をもっと積極的に出すよう指示を出す。

後半も、前半同様の流れで、日本、チャイニーズ台北ともに一歩も引かず一進一退の展開に。しかし、後半15分過ぎ、竹下、一木、渡辺の連続得点で日本が4点のリードを奪う。その後、日本もチャイニーズ台北の連続得点を許さず、守りをしっかり固め、最後まで落ち着いてプレーをし、初戦の勝利を手にする。

【個人得点】竹下：8、一木・高宮：4、渡辺・小舘・森本：3、矢崎：2

■ウズベキスタン戦

日本　56（31－11・25－9）20　ウズベキスタン

2戦目は、ウズベキスタン戦、この試合もDFから速攻を出すよう指示し選手たちを送り出す。

前半は、指示通り積極的なDFから相手にプレッシャーをかけ不利な体勢でのシュート、またパスカットで立ち上がりから矢崎、高宮の連続速攻、渡辺のロングシュート、一木の

7Mなど日本ペースで試合が進む。中盤も速攻を中心に攻撃し、DFでもGK板野のキーピングもあり前半で試合を決めてしまう。

後半は、攻撃の手を緩めることなく、全選手を投入し最終的には選手全員得点で勝利を掴む。

【個人得点】一木：12、矢崎：10、高宮：6、渡辺：5、竹下・森本：4、小舘・川畑・和田：3、岩田・福井：2、礒・細江：1

■カザフスタン戦

日本　30（16－15・14－14）29　カザフスタン

カザフスタンの大型バックプレーヤー（185㎝）、ポスト（183㎝）をいかにして守るかが、この試合の注意点であった。

日本は、今まで以上に積極的な6－0DFでカザフスタンの攻撃を守りに行くが、開始の攻撃でバックプレーヤーに押し込まれ、ミドルシュートを許す。日本は最初の攻撃でフォーメーションからセンター一木のカットインが決まるが、シュートに行った際にカザフスタンDFと接触し着地で右足を痛める。攻守の要を欠いたが、サウスポー森本が積極果敢にシュートを狙い立て続けにロング、ミドルを決め、またDFから両サイド、矢崎、高宮が素早い飛び出しから速攻で日本は得点を重ねる。カザフスタンはダブルポストから、高さ、大きさを利用しロング、ポストシュートを決め、得点していく。一進一退の攻防が続き、19分過ぎ攻撃で竹下を投入、攻撃にリズムが生まれ森本の連続ロングシュート、速攻と得点を重ねていくが、前半は日本もカザフスタンも主導権を掴めないまま、16対15の1点リードで折り返す。

後半、カザフスタンの連続ミス、GK板野の好セーブから日本は矢崎のサイド、小舘、森本の連続速攻などもあり4連取し20対15となるが、高宮の退場でカザフスタンに連続得点を許す。その後は、一進一退の攻防戦が続き、残り10分、26対24でカザフスタンがタイムを要求。日本は、タイムアウト後、小舘の退場、森本の退場と苦しい場面を迎えるが、高宮のミドル、竹下のカットイン、ポストと確実に加点し残り3分、29対27の2点差とした場面で、サイド高宮が1対1から角度のないサイドシュートを決め、30対27に。最後はカザフスタンに2連取されるが、30対29で勝利を掴み、予選グループ1位通過となる。この時点で、来年行われる世界選手権出場権を獲得した。

【個人得点】森本：10、矢崎：8、高宮：5、竹下3、小舘：2、渡辺・一木：1

■中国戦：準決勝

日本　19（9－13・10－14）27　中国

前半立ち上がり、高宮の速攻で得点するも、中国の高さある攻撃によるポスト、ミドル、ロング速攻と連続6得点を許す。8分過ぎ、日本はタイムを要求、GKを板野から茶圓に替え、デフェンスを4－2DFに変え、真ん中からの攻撃をやられないように指示を出す。日本は、替って入った茶圓がファインセーブを連発し、高宮の速攻、渡辺のミドルが決まり4対8となったところで中国がタイム。タイム後の攻撃もノーマークのサイドシュートを茶圓がセーブし、渡辺の連続ミドルシュートで20分、6対9とする。中国もセンターからロングシュートを決めるが、23分過ぎから、小舘ミドル、竹下ポスト、渡辺7Mと3連取し、9対10の1点差に。しかしここでテクニカルミス、パッシブプレーから中国の反撃を受け、逆に3連取を許し、前半は、9対13の4点差で折り返す。

後半、日本は竹下を前に出した5－1DFに変化、中国もDFの変化に対応しポストに背の高い選手を投入し、ダブルポストで攻撃を仕掛け、ポスト中心の攻撃で加点。日本も矢崎、渡辺、森本の連続得点で後半11分、12対17の5点差。その後日本は、福井の退場の間に中国に2本の7Mをあたえるが、茶圓の連続ファインセーブで切り抜ける。しかし中国にミドル、ポストでやられ、後半16分には12対19の7点差に。18分過ぎ中国退場の間に、渡辺、森本で得点を上げるが、中国も高さを利用した攻撃を展開し7Mで追加点を奪い、日本もマンツーマンDFを試み最後まで粘るが、最終的には8点差の19対27で敗戦。

【個人得点】渡辺：7、高宮：5、小舘・竹下・森本：2、矢崎：1

■カザフスタン戦：3位決定戦

日本　31（13－22・18－17）39　カザフスタン

前半、立ち上がりから日本、カザフスタン共に得点を重ねていくが、16分過ぎ日本のシュート、テクニカルミスの連続から、カザフスタンは№4のバックプレーヤーの1対

1を攻撃の起点にしカットイン、ポスト、ロング、FBと25分までに連続6得点、連続3得点をあげ、いっきに日本を引き離し、11対19と8点差をつけられる。その後、日本も2点を返すが、前半終了間際にまた、ミスからカザフスタンに2連取され、前半を13対22の9点差で折り返す。

後半、日本は4－2DFでカザフスタンを守ろうとするが、前半の得点差からか、カザフスタンに余裕を与え、また、№4の大型バックプレーヤーにマンツーマンを付けるが、空いた空間をポスト、サイドにカットインを許し、後半15分には20対31と11点差をつけられる。それでも日本は最後まで諦めず、速攻による得点で加点していくが、やはり前半の得点差がひびき、最後は31対39で敗戦する。

【個人得点】高宮：8、渡辺：7、小舘・竹下：4、森本・矢崎：3、川畑：2

最後に、この4位と言う結果は満足できるものではありません。また選手たちも当然、満足していませんし、悔しくてたまりません。しかしながら、選手たちは持てる力を十分発揮してくれたと感じています。

当然ですが、来年行われる世界選手権は、もっとレベルは高く、大型選手を相手にしなくてはなりません。今回の選手たちも十分わかっています。来年の世界選手権は、もうこの時点からスタートしています。選手たちが自分にもっと厳しく、もっと強い選手になって成長して、来年行われる世界選手権の場に立ってくれると信じています。

最後になりましたが、関係各位、また各所属の指導者の皆様をはじめ、多くの皆様にご協力賜りました事を重ねてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

■予選リーグ

Aグループ	順位		JPN	KAZ	TPE	UZB	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
	1位	日本		30○29	27○22	56○20	3	3-0-0	113	71	42	6
	2位	カザフスタン	29●30		28○15	43○28	3	2-0-1	100	73	27	4
	3位	チャイニーズタイペイ	22●27	15●28		40○30	3	1-0-2	77	85	-8	2
	4位	ウズベキスタン	20●56	28●43	30●40		3	0-0-3	78	139	-61	0

Bグループ	順位		KOR	CHN	IRI	HKG	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
	1位	韓国		35○25	61○19	51○7	3	3-0-0	147	51	96	6
	2位	中国	25●35		29○19	26○15	3	2-0-1	80	69	11	4
	3位	イラン	19●61	19●29		33○18	3	1-0-2	71	108	-37	2
	4位	香港	7●51	15●26	18●33		3	0-0-3	40	110	-70	0

◆9/18（日）

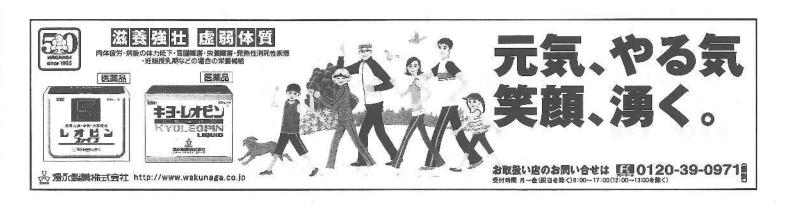
〈準決勝〉 中国 27（13-9, 14-10）19 日本

〈7-8位決定戦〉 ウズベキスタン 28（15-14, 13-12）26 香港

◆9/20（火）

〈3位決定戦〉 カザフスタン 39（22-13, 17-18）31 日本

〈決勝戦〉 韓国 32（15-8, 17-7）15 中国

日本は本大会4位となり、第18回女子ジュニア世界選手権（2012年7月・開催地；チェコ）の出場権を獲得しました。

日本女子ジュニア代表キャプテン　渡邉 裕奈

私たちは9月14日～20日にカザフスタンで開催されたアジア予選に参加しました。今回のアジア予選では予選リーグを無事に1位で通過し、世界選手権の切符は手にしたものの、準決勝で中国に、3位決定戦ではカザフスタンに負けて4位という結果でした。

この大会での一番の敗因は、やはり体格の差だと思います。自分たちより大きい選手に対しどのような攻守をすればいいのか、頭ではわかっていても試合となると今までに経験がないため対応しきれませんでした。大きい選手にはないフットワーク力やスピードをもっとつけること、大きい選手を相手にもっと実践の経験を積むことが必要だと感じました。

私生活では慣れない食事や慣れない生活など環境の変化に対応しきれずに体調を崩してしまう選手も少なくありませんでしたが、監督をはじめとするスタッフの方々がいつも選手の事を考えて下さり気付かって下さったから最後まで戦いきることができ、たくさんの方々の応援や支援があったからこそとてもいい環境でアジア予選を終えることができました。

この大会を通して個々がこのような経験を積めることに感謝し、もっと自覚と責任を持った行動をしなければならないと感じました。全てにおいて甘さがたくさんでた予選となりましたが、今回の経験を私たちがそれぞれの場所で活かし、来年の世界選手権に向けて頑張りたいと思います。

第40回 全国中学校 ハンドボール大会

男子：**名古屋市立平針中学校**（愛知県）
女子：**東久留米市立西中学校**（東京都）
が優勝！

最終順位

【男子】
優勝：名古屋市立平針中学校（愛知県）
２位：つくば市立手代木中学校（茨城県）
３位：江戸川区立鹿骨中学校（東京都）
　　　氷見市立西條中学校（富山県）

【女子】
優勝：東久留米市立西中学校（東京都）
２位：宇城市立松橋中学校（熊本県）
３位：浦添市立仲西中学校（沖縄県）
　　　名古屋市立滝ノ水中学校（愛知県）

第40回全国中学校ハンドボール大会回顧

第40回全国中学校ハンドボール大会実行委員会　**森本 克美**

私が京都府中体連の専門委員長をさせていただくことになった４年前、この大会が京都で開催されることが決まりました。京都では近年全国高校総体や毎年全国小学生大会が開催されてきたとはいえ、中学生の全国大会は初めて。期待と不安の中、平成23年度開催に向けて準備がスタートしました。それからの４年間は地元京都府の競技力向上と各大会の視察を重ね、本年を迎えました。今回の大会の競技役員として、府協会、府高体連ハンドボール専門部の方々だけでなく、府中体連ラグビー専門部の方々にも暑い中、駐車場係としてお世話になりました。本当にありがとうございます。

さてご存知のとおり、今回大会が行われた京都市は観光の街で、修学旅行等で訪れた方も多いと思います。有名な歴史的建造物や寺院が数多くあり、季節を問わず多くの観光客が京都を訪れます。今大会開催前日の８月16日にはお盆に迎えた先祖の霊を送る京都の伝統行事『五山の送り火』がありました。静かに燃える大文字の炎は、何とも言えない厳かな雰囲気を醸し出します。

そんな京都で、第40回全国中学校ハンドボール大会が、齋藤仁宏競技部長の開会宣言でスタートしました。全国の厳しい予選を勝ち抜いてきた各ブロックの代表チームが一堂に集うこの大会。今年は東日本大震災の影響で春の全国大会（氷見市）が中止されたこともあり、選手たちのこの大会にかける意気込みは計り知れないものだったように思います。

今年の３月、その東日本大震災は日本に大きな衝撃を与えました。地震や津波によって多くの人が犠牲になり、東北地方に甚大な被害をもたらしました。そんなとき『今私たちにできること』を大人も子ども達もみんな一緒になって考えました。東北のハンドボーラーにこの思いを伝えたい…そんな気持ちから様々な取組を考えました。

開会式では、地元代表として京都市立北野中学校の生徒会長松本拓海君が歓迎のことばを述べました。その中で、選手宣誓をした京田辺市立培良中学校男子主将の松本章汰君と女子主将の森陽子さんから、東北ブロック代表の２校（矢巾町立矢巾中学校と郡山市立郡山第一中学校）の主将に応援メッセージ入りのボールを手渡しました。

また先だって行われた近畿ブロック大会（京都府開催）では、近畿各府県の出場チームから応援メッセージをいただきました。それを寄せ書きとして各会場に掲示し、東北の代表チームにエールを送りました。大会終了後、大震災で影響が大きかった岩手・宮城・福島の全中学校ハンドボール部にメッセージ入りのボールを贈り、その３県には寄せ書きと会場に掲げられていた応援横断幕を送りました。この京都での熱い戦いぶりと、みんなが東北の仲間を思う気持ちが、少しでも被災地のハンドボーラーに届き、元気と勇気を持って頑張ってくれることを心から願っています。

さて試合の結果は、数々の熱戦の末、男子の部名古屋市立平針中学校が史上３校目の２連覇、女子の部東久留米市立西中学校は４年ぶり４度目の優勝を成し遂げ、また新たな歴史を刻み、第40回大会が幕を閉じました。

最後になりましたが、今回何よりもすべての各地区予選、都道府県予選、ブロック予選が開催され、代表が出揃ってこの大会が迎えられたことを心からうれしく思っています。ここに至るまでのみなさんの並々ならぬご努力があったことに感謝します。また、今大会を開催するにあたりご尽力頂きました（財）日本ハンドボール協会、（公財）日本中体連、京都府ハンドボール協会、京都府・京都市中体連、そして協賛各位に厚くお礼を申し上げますとともに、次年度開催である茨城県大会の成功と東北地方の１日も早い復興を祈念して今大会の回顧とさせていただきます。みなさん本当にありがとうございました。

男子優勝：名古屋市立平針中学校（愛知県）

名古屋市立平針中学校監督　鳥本 岳志

第40回全国中学校ハンドボール大会において、平針中学校が昨年に続き、優勝することができました。日頃からご協力・ご支援いただいている学校関係者の皆様、保護者の皆様、そして連日の猛暑の中、大会運営にたずさわっていただいた役員、地元生徒の皆様に心より感謝したいと思います。

今年は3月の震災で、特別な一年になりました。東海大会の開会式で主将の村瀬元基が選手宣誓をする機会をいただいたとき、3年生の部員全員で、宣誓文を考えました。大変な経験・生活をされている方々に自分たちはほとんど何もできない。中学生として「見ている人に勇気を与えるような熱いプレーをする」を宣誓文に入れようと決めました。

さて、今年のチームは「全国連覇」を目標に活動をスタートしました。去年のチームが大切にしてきたことを継続しようとするのですが、どうしても形ばかりを追いかけ、その本質的な部分を身につけることがなかなかできませんでした。その結果、肝心なところでもろさが出るということを何度もくり返しました。技術・戦術だけでなく、精神面など、自分たちにとって何が課題なのか、どうクリアしていくのか。その作業は、実は京都に入ってから試合の中でも続いていました。昨年のチームがテーマにしていた「いつも通り平常心で」。これがいかに困難で強い心が必要なのか。それを実感し、何とか乗り越えようとした先に目標の達成があったのではないかと思います。昨年のキャプテンのような突出したメンバーがいない中、みんなで力を合わせ、はるか先にあった目標をつかんだ選手たちに感動と勇気をもらいました。

新チームでも、自分たちの課題を明確にし、それをクリアしていく作業を積み重ねていきたいと思っています。

最後に、今年のチームが少しずつではあるけれども、確実にレベルアップを続けることができたのは、毎週のように合同練習・試合をし、切磋琢磨している名古屋・愛知のチーム・指導者のおかげです。本物の力を身につけていかないと、週末ごとに練習試合の結果が変わっていくシビアな環境があったおかげだと思います。また、全国各地のチーム・指導者の方々と交流させていただき、ハンドボールの基礎・基本とは何か？目指すべきハンドボールとは？という会話をする機会が年々増えています。ジュニア世代がレベルアップすることで、日本のハンドボールの発展に少しでも貢献できるよう、日々努力をしていきたいと思います。

名古屋市立平針中学校主将　村瀬 元基

昨年の夏、全国大会決勝の終了のブザーが鳴り、自分たちの目標が決まりました。「全国連覇」を達成するために、この一年間、努力を続けました。昨年に引き続き、練習に真剣に取り組むのはもちろん、部活以外でも「宿題や提出物の期限を守る」「授業中は積極的に発言する」などを心がけました。しかし、自分たちは気持ちの継続ができずに何度も何度も先生に怒られました。1月の春中の予選、そして4月の名古屋市の春季大会で自分たちのプレーができずに負けてしまいました。そのときは「自分たちは全く変われていない」と思いました。変わろうと思って臨んだゴールデンウィークでも、自分たちの甘さで大体附にダブルスコアで負けました。その後のミーティングで自分たちのチームキーワードが決まりました。「魂レボリューション」です。自分たちの弱い魂を変えようという自分たちに一番適したものだと思いました。

そして、いよいよ総体、鳥本先生に言われた「細かいところに目を向ける」ということを続け、市、県、東海大会を勝ち進み、全国大会出場を決めました。全国大会に入ってからも、思うように力が出ないときもありましたが、そのたびに先生やベンチのみんなに声をかけてもらい、勝ち上がることができました。最後の夜のミーティングでは、明日は自分たちのできることを思い切りやりきろうとみんなで確認しました。準決勝・決勝と自分たちのハンドボールをやりきり、目標を達成することができました。

この目標を達成することができたのは、鳥本先生や他の先生方、保護者の方々、先輩が支えてくれたからだと思います。「平針ハンドボールファミリー」に感謝したいと思います。そして最後に、一緒に3年間努力し続けてきたチームメイトに「ありがとう」を伝えたいと思います。

女子優勝：東久留米市立西中学校（東京都）

東久留米市立西中学校ハンドボール部顧問　尾石 智洋

はじめに、東日本大震災に被災された方々にお見舞い申し上げますとともに、少しでも早い復興を心より願っております。今年度は震災の影響で『春の全国大会』が中止になるという緊急事態となりました。本校も含めたくさんの生徒達が、辛い気持ちになりました。そんな思いを考えてくださり、氷見の大会本部からは全国大会出場記念メダルを送ってくださいました。お心遣いに感謝しました。その後、生徒達は今できることを考え、復興のお手伝いができないのか考え、そして今まで以上に練習に励んでいました。今回東北の２チームが元気に参加でき、とてもうれしい気持ちになりました。また、開会式の選手宣誓でも、日本人みんなで頑張ろうと熱い思いになりました。しかし、被災されている方々へ心無い発言をする人もいるということも聞き、悲しい気持ちにもなりました。この全国大会が開催され、戦える喜びを改めて感じ、一試合一試合、全員で頑張っていくことを心に誓いました。

この度は、第40回全国中学校ハンドボール大会におきまして４年ぶり４回目の優勝を果たすことができました。今年のチームは、スピードとダイナミックさを兼ね備えたスケールの大きいチームを目指して、灘先生と共にチームを作ってきました。さらに、文武両道の精神を持ち、学校でも一生懸命に何事にも取り組んでいる生徒達と共に、気持ち良く生活してきました。

大会では、準々決勝の氷見十三中との試合は延長の末に勝たせていただき、大学の後輩に当たる大道君と涙ながらに「優勝してください」と熱く交わした握手が心に染みました。

決勝は、お互いの戦術と駆け引きの中、緊張感ある試合ができ、最高に楽しい時間をベンチ一体となって送ることができました。『自分を信じること・仲間を信じること』そんな人としての高まりが、素晴らしい結果に繋がったのかと思っています。

最後になりましたが、応援してくださいました、東京都ハンドボールの関係者の方々、東久留米市関係者の方々、保護者の方々、清水正昭校長をはじめ、学校関係者の方々、OB・OGのみなさんありがとうございました。そして、大会を運営してくださいました京都ハンドボール関係者の皆様、生徒役員のみなさんありがとうございました。最高の大会運営に感謝いたします。

そして今後更に、ハンドボールを通して一人でも多くの日本人が元気になれるように願います！『がんばれ日本!!!』

東久留米市立西中学校ハンドボール部主将　大島 虹帆

この度は、念願の全国大会優勝ができてとてもうれしく光栄に思っています。一昨年の全中、全国制覇を目指して宮崎に行きました。しかし、ベスト８で敗退し涙を流しました。そして昨年の全中、再び頂点を狙って広島全中へ行きました。ベスト８で負けてしまい、また悔しい思いをしました。私たちは１年の時から２年連続のベスト８で悔しい思いをした先輩を見てきました。

そして、迎えた今年の全中。「一戦一戦を大事に戦っていこう。試合を楽しもう」と試合にのぞみました。一戦目、とても緊張しましたが勝つことができ、迎えた二戦目。氷見十三中との試合はシュートが決まらなくて、５点ビハインドまで点差が開いてしまいましたが、先輩たちを見てきて、「ここで絶対に負けたくない」と強く思い、後半追いつくことができ、延長戦の末、接戦を制しベスト８の壁を乗り越えることができました。先輩たちがいてくれたらこそ、勝てたのだと思います。準決勝では、１試合でも多く試合をしようという気持ちでのぞみました。決勝は松橋中との戦いで接戦でしたが、みんなでできる最後の試合を楽しむことができたと思います。私たちは、今まで３年間しっかり練習する環境を与えていただきました。そして、休日も返上して厳しく指導してくださった先生方にはもちろん、支えてくださった多くの方々に感謝をしています。尾石先生、灘先生、スタッフの皆さん、先輩方、いろいろな人たちのおかげで優勝ができました。お世話になった方々に恩返しができて嬉しかったです。

そして最後に、私たちは今年「感謝」を学びました。東日本大震災で、自分たちがハンドボールが当たり前にできることへの感謝。周りの協力してくださる方々への感謝。たくさんのことが学べたと思います。最高の夏でした。ありがとうございました。

写真提供・スポーツイベント社

戦　評

男　子

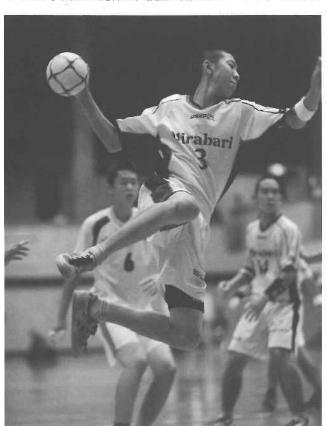
▼準決勝

手代木（茨城）　36（19－6、17－10）16　西條（富山）

西條・安平のオープニングシュートで始まった準決勝だったが、手代木の連続6ゴールで開始5分後には5点の差が開く予想外の展開となった。手代木の高い位置でのプレスに西條の高崎・出口両フローターは封じ込められ、攻撃させてもらえない。安平が果敢に撃っていくものの、手代木の高い壁とGK唐澤の前にゴールネットを揺らすことができない。一方、手代木は森永・櫻井・中井川がポストを絡めて上手く外へ割り込んで、着実に得点を重ね、13点もの大差をつけ前半を折り返した。

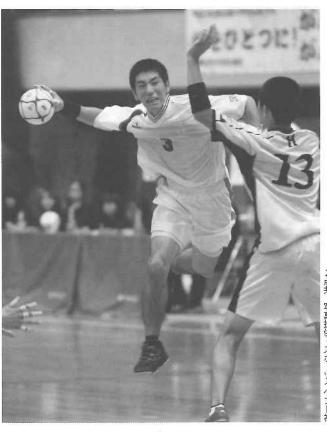
後半に入ると西條は一線からオールマンツーマンへとディフェンスを変え、フリースローラインの内側へ入られてもGK奥山が好守、10分過ぎまでは手代木の攻撃を抑え、互角の戦いを見せていた。しかし、次第に手代木はリズムを取り戻し、ボールを持たないところでマンツーマンをかわして西條ディフェンスを崩し始めると、前半の勢いそのままにゴールへ飛び込んでいく。西條は最後まで健闘したが、手代木の破壊力の前に敗れ去った。

平針（愛知）　34（16－15、18－12）27　鹿骨（東京）

前半開始から一進一退の展開となる。平針は、スピードのあるオフェンスで得点を重ね、ディフェンスも間を狭くし、足を使ったディフェンスで鹿骨のオフェンスのリズムを作らせず、速攻につなげるが得点につながらずに突き放すことができない。対する鹿骨は、機能し始めた5－1ディフェンスから速攻につなげ、それを伊藤が確実に決めることでひけをとらない。16分からの山田の速攻、カットインシュートなどで4連続得点した平針が12対10と初めて2点差をつけ、このまま勢いに乗るかと思われたが、鹿骨・村上の長身を活かしたロングシュートが決まりだし、20分についに逆転する。その後も互角のまま、終了間際に平針・大谷がサイドシュートを決め再び逆転し、16対15で平針1点リードで前半が終了する。

後半も互角の立ち上がりとなるが、オフェンスでリズムが作れない鹿骨に対し、さらにオフェンスでリズムに乗る平針が、5分以降山口の速攻、1対1、早川のサイドシュートなどで一気に流れをつかみ、10分で25対20とリードする。その後も着々得点を重ねる平針に対し、鹿骨はオフェンスで攻めあぐねディフェンスも守りきれずに点差は広がっていき、勢いにのる平針が決勝への切符を手にした。鹿骨は、後半ディフェンスからの速攻にもちこめず苦しい展開となったが、21分以降、宮崎、原らの5連続得点で粘りを見せたが、勢いにのる平針に対し、後半流れをつかめず惜敗した。

▼決勝

平針（愛知）　29（15－9、14－14）23　手代木（茨城）

この大会の最後の試合となった男子決勝は堅実なDFと、多彩なOFバリエーションを持った平針が、一度もリードを許すことなく、2年連続の優勝を決めた。立ち上がりから、平針のキャプテン村瀬のポストシュートやミドルシュートなどで、7分までに5対0と力を見せつける。7分を過ぎて中井川のミドルシュートが決まると、手代木は2本の7mTと屋代のカットインなどで6対9まで追い上げる。しかし、平

2点共　写真提供・スポーツイベント社

針は堅いDFから速攻で、14分から22分までに5連続得点をあげるなど一気につき離した。手代木も森永の速攻でねばるが、前半を15対9とリードされる苦しい展開となった。後半、手代木は森永と櫻井のミドルシュートで得点を重ね、3点差とした9分から、DFを5－1に変え、平針の速いパスまわしを防ぐことに成功し、一時1点差にまで追い上げる。しかし、16分に山田がポストシュートを決めると、手代木のDFにも対応し、29対23と引き離して優勝を決めた。

女子

▼準決勝

松橋（熊本） 19（9－8、10－8）16 滝ノ水（愛知）

スピードと攻撃力のある両者は、松橋・村口、滝ノ水・重富の得点で、ほぼ互角の立ち上がりで前半が開始した。前半13分、4対4の同点から松橋前田のサイドシュートが決まり、一歩リードした。両GKの好守もあり、一進一退の競り合いが続き、前半を9対8で松橋がリードして折り返した。

後半、両チームは多彩な攻めで得点を重ね、12分、12対12の互角の展開となったが、松橋前田の速攻、中川のポストシュート、竹原のロングシュートも決まり、19対16で松橋が粘る滝ノ水を振り切って、熱戦にピリオドが打たれた。

東久留米西（東京） 26（12－10、14－8）18 仲西（沖縄）

女子準決勝は、高さある東久留米西が堅いディフェンスからの速攻を中心に終始ペースを握り、決勝へと駒を進めた。仲西は、高い東久留米西のディフェンスに対して、コートを広く使い安里の1対1から速いパス回しでくずしていくが、GK八木の好セーブにはばまれ、なかなか得点を重ねられない。一方、東久留米西は、堅いディフェンスからの速攻や石原のサイドシュートなどでリズムにのると、仲西の高いプレスのディフェンスに対しても、1対1や細かいパスでかわし、前半2点差の東久留米西ペースで折り返した。

後半も東久留米西が、堅いディフェンスからの速攻を中心に河原畑、青らが加点し、15分までに21対11と大きくリードを広げた。仲西も最後まであきらめずにくらいつくが8点差で敗退した。

▼決勝

東久留米西（東京） 21（10－9、11－11）20 松橋（熊本）

松橋のスローオフで始まった女子決勝、松橋・竹原のロングシュートを東久留米西・GK八木が止めると、東久留米西・河原畑のロングシュートを松橋・GK岡村が止める、松橋がポストへの落としで先制すると、東久留米西も同様にポストへ落として取り返すという、両者互角の幕開けとなった。いずれのチームも高い打点のフローターと、素早いポストを誇るチームであるが、互いに攻守のGK・ディフェンスもまた堅牢であるため、なかなか得点し難い展開となり、1点差で前半を折り返した。

後半に入ると、東久留米西のポスト青が巧みな位置取りを見せ、20分過ぎに本試合初めての3点差となる。追いかける松橋はディフェンスをオールマンツーマンに変え、パスミスを誘ってラスト1分で1点差まで追い上げる。残りわずかとなった時、松橋はスカイプレーに賭けサイドからボールを上げるが、東久留米西に奪われタイムアップ。1点差で逃げ切った東久留米西に栄冠が輝いた。

2点共　写真提供・スポーツイベント社

株式会社FDR・フレンディア

さらに新しくなりました！

ドクター・水素水®

NEU PREMIUM

ノイ プレミアム

スティックを
入れるだけで
水素水が出来る！

**ドクター・水素水は、
水に入れるとスティックから
常時水素が発生するので、
高い濃度の水素を
摂り入れることが出来ます！**

水素(H_2)と有害な活性酸素の働き

体内の有害な活性酸素の蓄積は、環境、タバコ、酒、ストレス、紫外線などが原因の一つであると言われています。水素(H_2)はこの有害な活性酸素と反応し、水(H_2O)になり、体を健康へと導いてくれます。1日1.5ℓ～2.0ℓの水素水を何回かに分けて飲用する事が大事なポイントです。

※活性酸素は、お酒、タバコ、食品添加物、化学物質、ストレス、紫外線、そして激しい運動時にも多量に発生します。

**スポーツアスリートに
おすすめ！**

ドクター・水素水の使い方

0.5～2.0ℓ用の清潔なペットボトルに水を注ぎ、スティックを入れてください。(ミネラルウォーターのペットボトルをおすすめします)。投入後2時間後には豊富な状態になりますが、より濃い水素水をお飲みいただくためには、一晩(約8時間～)放置して翌朝には水素豊富水が出来上がります。

ご提案

Q:ペットボトルに何本いれたらいいですか?

1本・・・健康維持のために
2本・・・体調のすぐれない方
3本・・・体調管理が必要な方

※水素(H_2)の作用について

水素(H_2)の働きに関して世界の大学や専門機関が学会誌に論文を発表しております。詳しくは下記のサイトをご覧ください。

http://.suisosui.org/

※水素(H_2)は厚生労働省既存食品添加物192番に指定

※本製品は商品改良のため予告なく変更する場合があります。

JADMA
社団法人日本通信販売協会会員

第38回
全国高等専門学校ハンドボール選手権大会

【最終順位】優勝：徳山高専　準優勝：熊本高専八代　3位：豊田高専・函館高専

第46回全国高専体育大会・第38回全国高専ハンドボール選手権大会を振り返って

大会主管校事務局（東京高専）　古屋 正俊

第46回全国高専体育大会・第38回全国高専ハンドボール選手権大会は8月27、28日に、神奈川県の川崎市とどろきアリーナで開催されました。この会場は東日本大震災の避難所として、大会直前の7月まで被災者の皆さんの生活拠点となっていました。その会場に、全国の厳しい予選を勝ち抜いた12チームが一同に結集し、「東日本大震災復興支援・とどけようスポーツの力を東北へ！」のスローガンを掲げて、本大会が開催できたことは大変意義深いといえます。

競技に先立ち、8月26日に開会式を行ないました。全国大会に出場した12校のチーム紹介に続き、開催校の東京高専の東濱主将が「今ここでハンドボールをできる喜びと、大会を支える全ての皆さんに感謝する気持ちを持って、全力で戦います！」と力強く選手宣誓し、熱戦の火蓋が切られました。

高専は全国に57校（国立51、公立3、私立3）あり、ハンドボールの実施校は43高専。小さな組織ですが、ハンドボールの普及率は75％と高く、近年では女子部（3校）も結成され、競技人口は微増傾向にあります。地区予選は7月に全国8地区で開催され、高専生にとっての最大の活動目標が8月の全国高専体育大会となっています。

予選リーグから白熱の試合が展開されました。決勝トーナメントに勝ちあがった豊田高専は、過去7回の最多優勝回数を誇り全国大会29回目の出場。対する徳山高専は中国地区の激戦区を勝ち抜き、過去1回優勝し2年連続12回目の出場。もう一方の対戦は、過去1回優勝し6年連続6回目の出場で勢いに乗る函館高専。対する熊本高専八代キャンパスは、過去2回優勝し昨年は3位となった6年連続27回目出場の強豪。

準決勝の熊本高専（八代）vs 函館高専は、序盤より互いの持ち味を活かす互角の展開。延長戦に突入し終了間際まで一進一退の息詰まる攻防は、館内を大いに沸かせました。決勝戦は、徳山高専と熊本高専（八代）の対戦。徳山高専は、前半開始より得意の速攻で連取し試合の主導権を握り、後半も安定した試合運びで熊本高専（八代）の反撃を要所で抑え、15年ぶり2回目の優勝を飾りました。

決勝戦前には、ハンドボール専門ブランドの協賛各社より提供されたシューズ、バッグ、ウェアー、ボール等の多数の協賛記念グッズをゲットする、特別協賛企画「ホンキの一投コンテスト」を実施しました。選手はもちろん、幼児から女性、OB、スタッフまでもが「ホンキの一投」にチャレンジし、長蛇の列が出来るほどで、館内が大変盛り上がりました。また本大会では、インターネットを活用した記録写真の販売サービスや、各試合のダイジェスト版の動画配信も実施しました。大会映像は http://www.jnet-tv.com/handball/ でご覧いただけます。

現状の高専大会は、決勝までの2日間で4試合を戦うタイトな競技日程になっています。選手の疲労軽減やベストパフォーマンスを引き出すには、今後は競技日程を工夫する余地もあると思います。また来場のOBからは、全国大会時の夜間に実施していた「OB交流戦」の再開を期待する声もありました。卒業後も高専ハンドボールファンとして能動的なかかわりを求めているOBの存在は、現役選手への影響力も大きく、OB組織との連携も視野に入れた活動の必要性も感じました。

最後となりましたが、本大会の開催にあたり、ご支援ご協力を賜りました各協会、各連盟、協賛各社、全ての役員・スタッフ・関係者の皆様に、改めてお礼を申し上げ、第38回全国高専ハンドボール選手権大会の報告といたします。ありがとうございました。

写真提供・オールスポーツコミュニティ

優勝チームの声：徳山高等専門学校

徳山高専チーム役員　池田 光優

本大会は、東日本大震災復興支援ということで開催された大会でした。被災され、未だ不安定な生活を送られている方々へお見舞い申し上げます。大会会場も川崎市のとどろきアリーナという事で、つい先日まで避難所として利用されていた場所でした。このような厳しい状況の中、大会開催および運営にご尽力いただきました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて、本チームは主力が３年生で、高体連の試合の中で実力を付けてきたチームです。大会前は若いチーム故のもろさが出るかもと危惧していましたが、そういった所を上級生の4,5年生がうまくカバーして非常に良いチームになったと思います。試合結果のみを見みるとそこそこのスコアで勝ち上がったように見えますが、裏ではちょっと弱気なことを言ったのをなだめたり、バテバテなのをごまかしたりして何とか最後まで勝ち残る事が出来ました。このチームは高体連に参加しているため一発勝負のトーナメント大会を多く経験しています。そういった所で、ゲーム序盤の５～10分である程度点差を付け、そのセイフティーを保ち続けるというゲームプランを持っているというのが他のチームとの違いとして現れたと思います。来年も期待できると思っていますが、来年は、皆さんも研究してくることでしょう。そんな中でも来年もまた全国大会に出場できたらと思っています。どうもありがとうございました。

徳山高専主将　松永 佑介

私は、このチームで優勝できたことが未だ夢のように感じています。なぜなら、私が入部した当時の目標は、「全国大会で優勝」ではなく、「地区大会で一勝」だったからです。

転機が訪れたのは、私が３年生の時でした。それまで、初心者ばかりだったチームに、どっと経験者が増えました。彼らの入部によって、それまで一度も勝利を味わったことのない私達が勝利する喜びを知りました。更に、「下級生ながらプレーの上手い彼らに負けない」という気持ちから上級生全体がより一層の努力をするようになり、とても良いムードで部活が行えるようになりました。

その結果、昨年度は念願の全国大会出場を果たすことができました。しかし、この大会では八代高専に一点差で敗れ、悔しい思いを先輩達にさせてしまいました。このとき、「来年こそは優勝します」と先輩達と約束をしました。

今年は、これまで指導をして下さっていた池田光優先生が明石に転勤されたので、チーム作りそのものを私が行うことになりました。このような大変不安な状況でしたが、全員が私を信頼してくれたお陰で、とても良いチームを作ることができたと思います。もし、「優勝」という結果がついて来なかったとしても、みんなとのプレーに後悔はなかったので、とても清々しい気持ちで５年間最後の大会を終えることができたと思います。

一つの試合を、一つのプレーを、チームのみんなと一緒に後悔しないで行うこと。勝つことにこだわるのではなく、楽しんでプレーすることにこだわる。これを忘れないで、多くの人にハンドボールをプレーして欲しいと思います。

■準決勝

徳山高専　23（11-3, 12-13）16　豊田高専

試合開始1分、徳山先制で始まるが、お互いミスが多く、得点が入らない。3分過ぎに、徳山が得点を挙げると、その後はミスの応酬。9分過ぎ、徳山得点で3対0のロースコアの展開。ここから、徳山は、ポストにボールが回り始め、着々と点を重ねる。一方豊田は相変わらずミスが多く、徳山の速攻を許す展開。豊田は17分半に、初得点を挙げるが、1対8。結局前半は、11対3の徳山リード で終了。

後半は、一進一退のゲーム展開。なんとか勝利に執念を燃やす豊田もふんばり、後半20分過ぎには3点差まで追いすがるも、ここまで。最後は力尽き、23対16で徳山が決勝進出となった。

熊本高専八代　30（13-14, 12-11 / 4-2 延長 1-2）29　函館高専

序盤動きの硬い八代に対し、函館は素早い攻守の切り替えからハーフ速攻を矢継ぎ早に繰り出し、4番小澤、5番川村らの得点で5分に5対1と先ず主導権を握る。ここで八代は早めのタイムアウトを取って流れを断ち切ると、ずらしから右サイド15番高森のシュートが効果的に決まり反撃を開始する。函館は堅いDFから八代のミスを誘い、幾度となく速攻のチャンスを得るが、八代GK1番松本の好守やパスミスで突き放すことができず、逆に10分過ぎからの3連取で7対7と試合は振り出しに戻ると、前半は一進一退のまま14対13と函館1点リードでの折り返しとなる。

後半立ち上がり、函館は7番茂木の右45度からのミドル、小澤のポストで2連取し突き放しにかかるが、八代も4番浦崎の左サイド、速攻で一歩も譲らず再び17対17と追いすがる。この後も八代は11番上野の退場などで常にリードを許す苦しい展開が続くが、チームの集中力は途切れず13分浦崎の左サイドで22対22と三度同点に追いつく。15分高森のカットインで遂にこの試合初めてのリードを奪う。追いかける形となった函館は徐々にフローター陣の足が止まり出し、得点が奪えない時間帯が続くが、18分6番成田が角度の無い左サイドをねじ込むと再び息を吹き返す。最後の5分間八代を無得点に抑える一方で小澤のポスト、川村のミドルで同点に追いつき延長戦にもつれ込む大接戦となる。

延長前半八代は2番松本が大活躍、右45度から積極的に打って出て4連続得点。勝負は決まったかに見えたが、函館も小澤のポスト、3番後藤の速攻で2点を返し後半に望みを繋ぐ。2分30秒成田の左サイド、3分30秒小澤のポストと驚異的な粘りで再び同点に追いつく。会場がどよめきに包まれる中、残り1分八代上野が左45度から渾身のミドルを突き刺し熱戦に終止符を打った。

■決勝

徳山高専　28（15-10, 13-10）20　熊本高専八代

準決勝の激闘の影響か動きの重い八代に対し、徳山は立ち上がりから7番荒井の右サイド、14番濱崎のパスカット速攻などで4連取し一気に主導権を握る。八代は5分15番高森の右サイドでようやく初得点をあげると徐々にリズムを取り戻し、2番松本、7番高木の両左腕を中心に反撃に出る。徳山は八代フローター陣の力強いカットインに警告がかさみ、10分には早くも累積警告で退場者を出す苦しい展開となるが、八代はこのチャンスをシュートミスなどで潰すと、逆に一人少ない徳山に逆速攻を許すなど14分9対4とリードを広げられてしまう。ここからは八代が両サイドのシュート、速攻を中心に追いかけるも徳山も2番池岡のコントロールから10番古谷のカットイン、自らのミドルなどで一進一退の展開となる。前半終了間際徳山は速攻を止めにいった池岡が退場となりピンチを迎えるが、この7mTをGK1番小川がファインセーブ、前半は15対10と徳山5点リードで折り返しとなる。

後半開始早々八代はパワープレーの好機に松本のミドル、高森の右サイドで2連取、12対15と3点差まで詰め寄り流れを掴みかける。しかし徳山は退場から戻った池岡がすかさず鋭いフェイントから2連取、流れを断ち切ると八代のミスを逆速攻につなげて一気に5連取、6分20対12とこの試合最大のリードを奪う。八代も高木のセンターからのミドル、速攻で意地の2連取を返すも疲労からフローター陣の足が止まり、攻め手が無くなってくる。ここで徳山はディフェンスラインを上げて一気にギアチェンジ、パスカットからの連続速攻を仕掛けて15分25対15とリードを広げると八代に反撃の力は無く、このまま徳山が15年ぶり2度目の優勝を達成した。

第13回 全日本ビーチハンドボール選手権大会

■最終順位■

［男子］
優　勝：ボンチフェローズ（大阪）
準優勝：FST（東京）
3　位：日本体育大学（東京）
［女子］
優　勝：日本体育大学（東京）
準優勝：あぶらおおめ（東京）
3　位：風見鶏クラブ（兵庫）

大会を振り返って

兵庫県ビーチハンドボール委員会　丸茂 康子

平成23年8月27日・28日、猛暑の続くなか、神戸市が誇る景勝地アジュール舞子・明石海峡大橋を望みながら、「第13回全日本ビーチハンドボール選手権大会」が開催されました。また、今大会は、東日本大地震復興支援として「届けようスポーツの力を東北へ！」を合言葉に熱戦が繰り広げられました。神戸の街も平成7年阪神大震災を経験し、自然の持つ脅威を体験するとともに、全国各地からのあたたかいご支援に勇気づけられました。元のようにはなりませんでしたが、復興に努力してまいりました。どうぞ東北の皆様、勇気と忍耐で少しずつ前進してください。

さて、大会運営は回を追うごとに慣れてきました。設営では短時間のうちに出来上がり驚きました。これには地元高校生や強化合宿に参加する大学生の協力があったことは言うまでもありません。設営や撤収に運営委員だけでなく大会参加チームの選手が手を貸してくださり大変感謝しております。

毎年のことながら参加チームが少なく開催地側としては寂しく思います。全日本…と銘うっている大会です。現在はフリー参加ですので、より多くのチームが参加する対策を思案しています。それにはまだまだビーチスポーツとしてのハンドボールを普及しなければなりません。グランドや体育館でのハンドボールと違った面白さやゲーム等メディアを媒介に広めなければいけません。

また、一昨年台湾で観戦したビーチゲイムズの大会ではゲーム展開の速さとピルエットシュートを当たり前のように打ってくる選手の身体能力の強さに驚きました。日本も「なでしこジャパン」ではありませんが、ビーチを主体にする選手の育成や長期的な展望を図らないと遅れていくのではないかと危惧しています。

何はともあれ、今後より一層ビーチハンドボールが地元、関西、中国、四国というように西日本からも発展普及していくよう取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、本大会開催にあたり、神戸市をはじめ財団法人神戸市緑化協会関係各位のご協力により無事に終了することができました。心より感謝いたしております。

戦　評

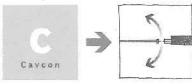
■男子決勝

ボンチフェローズ　2（13－7、12－11）0　FST

ボンフェローズが3点先取し、ともにGKの好守もあり、4分から、FSTも2本のピルエットシュートなどで逆転したが、ボンチフェローズもGKシュートなど2点シュートを3連続して再逆転し前半を終わる。後半は5分まで4：4と対等であったが、FSTが3本の2点シュートで6点リードしたのが、7分。そのまま逃げ切れる展開かと思われたが、ボンチフェローズもしぶとく追いすがり、ともに失格者を出しながら終了間際に追いつき、ゴールデンゴールに持ち込む。ボンチフェローズ⑤松山のシュートがゴールインして初優勝した。

■女子決勝

日本体育大学　2（11－3、7－6）0　あぶらおおめ

開始早々、日体大③青山のシュートで先制し、④大山らの得点とGK小野澤の好守でペースをつかみ前半を取る。後半はあぶらおおめの③和田のシュートで先行、日体大も応戦し、3分で3：2とあぶらおおめがリード。一進一退が続き残りで4：4。終了1分前に日体大③青山のGKシュートが決まり2点リード。すぐさま、あぶらおおめGK⑨三瓶が無人のゴールシュートで6：6となる。残り10秒日体大②斉木のシュートで前・後半を取り勝利する。

男子優勝：ボンチフェローズ

ボンチフェローズビーチハンドボールチーム監督
野田 猛一

ボンチフェローズ（桃山学院高校、此花学院高校OB主体）は、大阪社会人リーグにて活動しており、昨今は、大阪代表でジャパンオープントーナメントに出場させて頂いております。昨年より兄弟チームのHC大阪が全日本ビーチハンドボール選手権大会に参加しており、今年は2チームで参加させて頂きました。大会3日前に、元FST所属でビーチハンドボール国際大会出場経験者の大野コーチからルール・戦術を指導頂き、今大会に挑みました。オフェンスでは昨年経験者の兼本・徳永・奥田、ディフェンスではGK新名が中心になり、試合毎に修正を重ねました。ビーチ未経験者の松山、小島、関山、西村の活躍もあり、昨年優勝の日本体育大学を準決勝で倒し、決勝ではビーチハンドボール初心者ならではの采配が功を奏し、一昨年優勝のFSTを倒し、悲願の初出場初優勝することができました！　試合を重ねるごとに、ディフェンスの要である小島とGK新名の連携が機能し、オフェンスでも兼本の絶妙なパスワークから松山のスピンシュートで得点を重ね僅差をものにできたのが結果に繋がったと思います。ビーチハンドボールは、ゴールキーパーも含めゲーム性が高く、初めてみる方にも解りやすいスポーツだと思います。また、ハンドボールにも活かせる点が多く、チームにとっては非常に良い夏場のトレーニングにもなりました。今後もビーチハンドボールを盛り上げていきたいですし、我がチームからも日本代表選手が選出されるようなチームになりたいと思います！！

最後に、ボンチフェローズ総監督の杣山英司さん、練習場所を提供頂きました桃山学院高校の高橋精一先生、井上博人先生、優勝しましたよ！！

女子優勝：日本体育大学

日本体育大学　斉木 梨恵

はじめに、東日本大震災の犠牲者の方々の御冥福お祈りし、被災者の方々には1日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

第13回全日本ビーチハンドボール選手権大会の開催にあたり、御尽力戴きましたビーチハンドボール委員会及び兵庫県ハンドボール協会の関係各位の皆様方に心より感謝を申し上げます。

ビーチハンドボールは、年齢の制限がなく、たくさんの方々が出場できるスポーツです。そのような中、全日本ビーチハンドボール選手権大会で優勝を勝ち取ることができた事を嬉しく思います。日体大は、ここ数年ビーチハンドボールの研究及び普及、強化という側面から参加をさせて戴いております。昨年のサマーカップや全日本選手権、そして、今年のサマーカップに於いても、あと一歩のところで敗退してしまい優勝することができませんでしたが、たくさんの皆様の御助言を戴きながら、今回その悔しさをリベンジすることができました。

ビーチハンドボールは、砂地で思うように動くことができなかったり、通常の7人制のハンドボールとはルールや特徴が異なり、私たちはその違いに戸惑うことがありました。しかし、試合を重ねていき、砂地にも慣れ、チームも一丸となることができました。それが、優勝への架け橋になったと思います。

ビーチハンドボール特有のピルエットシュートやスカイシュートの技術を、今後さらに身に付けなければいけないという課題を見つけることができました。これらの技術を身に付けることにより、より一層ビーチハンドボールの楽しさを味わえることができると思います。ビーチハンドボールは、開放的で楽しく、奥深い競技なので、これから全国のたくさんの人に知ってもらい、7人制のハンドボールとは違う楽しさが広まればいいと思います。

最後になりましたが、夏の暑い中、今大会の為に、大変な準備と会場設営をして下さった日本協会、兵庫県協会ビーチハンドボール委員会、親和女子高校ハンドボール部の皆様、本当にありがとうございました。

第19回 日・韓・中 ジュニア 交流競技会

男子		日本	韓国	愛知選	中国	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
1位	日本		35○33	32△32	32○24	3	2-1-0	99	89	10	5
2位	韓国	33●35		38○29	45○29	3	2-0-1	116	93	23	4
3位	愛知選抜	32△32	29●38		31○28	3	1-1-1	92	98	-6	3
4位	中国	24●32	29●45	28●31		3	0-0-3	81	108	-27	0

女子		韓国	日本	愛知選	中国	数	勝-分-敗	得点	失点	差	点
1位	韓国		38○26	45○28	51○13	3	3-0-0	134	67	67	6
2位	日本	26●38		39○20	55○11	3	2-0-1	120	69	51	4
3位	愛知選抜	28●45	20●39		51○20	3	1-0-2	99	104	-5	2
4位	中国	13●51	11●55	20●51		3	0-0-3	44	157	-113	0

第19回日・韓・中ジュニア交流競技会参加報告

総監督　**越石 信次**（全国高体連専門部部長）

このジュニア交流競技会は、日本、韓国、中国の三カ国が持ち回りで実施しているもので、2011年は愛知県名古屋市において8月23日(火)から27日(土)まで開催されました。

日本選手団は11競技に244名、ハンドボール競技からは全国から選抜した選手28名、高体連専門部から役員5名の33名が参加しました。

試合は、中村スポーツセンターを会場に開催地の愛知県選手団を加え4チームの総当たりで行われました。

8月24日（水）からの試合は、男子は一日目に愛知戦を引き分け、二日目の中国戦、三日目の韓国戦に勝利し対戦成績が2勝1分で優勝、この大会5連覇を達成しました。女子は一日目の愛知戦、二日目の中国戦と快勝したのですが、最終日の韓国戦に破れ対戦成績を2勝1敗とし韓国に次いで2位となりました。

男子の試合では、最大7点をリードされる場面から、愛知戦は引き分けに、韓国戦は逆転勝利でした。この二試合は、足を使い懸命に声をかけ合う選手の姿から「負けられない。何とかしなければいけない」という連覇に向けた強い気持ちが伝わってきました。女子は、大学生に胸を借りた強化合宿が順調に仕上がり、最終日の韓国戦が勝負と考えられました。この試合は、選手に緊張もあったのか惜しいシュートが続き、前半早々に主導権を握られると悪い流れを変えることができませんでした。後半は本来のプレーが発揮でき互角の展開となりましたが力及ばず敗れました。今回、日本代表として参加した選手達は、監督・コーチの指導のもと、チームとしていかにまとまるか、個人の役割をどう果たすかなど、限られた時間の中で最大限の努力をしてくれました。今後は、この貴重な国際大会の経験を活かし、世界を舞台に活躍して欲しいと思います。

大会の参加に際しては、4月に大阪で選考会、8月中旬に男子は神奈川、女子は東京で2泊3日の強化合宿、試合前日の8月23日（火）に名古屋入りして最終調整というスケジュールでした。大会開催地の愛知県ハンドボール協会を始め、多くの方々に多大なるご支援とご協力を賜りましたことに心から感謝を申し上げます。

今後も、全国高体連の強化活動へのご理解とご支援をお願い申し上げまして、大会参加報告といたします。

男子チームの声

第 19 回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

男子監督　國府　功（全国高体連専門部副委員長）

標記大会は、8月 23 日から 27 日まで愛知県名古屋市中村スポーツセンターにおいて開催されました。

今大会は、私にとって初めての日本開催ということもあり、絶対に勝たなくてはならないという緊張感を持って臨んだ大会でした。参加チームは、日本・韓国・中国・そして地元愛知選抜の 4 チーム。インターハイを終えて疲れの残っている選手もいましたが、今年も昨年同様に 8 月中旬に 3 日間の事前合宿を東京で実施しました。合宿初日にそれぞれの選手の選考理由とチームでの役割、また、その役割をしっかりと果たすことによって自ら結果が出ると話し、合宿に臨みました。8 月 10 日に東海大、11 日に日体大、12 日に中央大と各大学の胸を借りる形で実施しました。昨年の反省を生かし、コミュニケーション不足を補うためにも選手同士の会話の大切さを訴えました。一部の選手がけがで参加できなかったのですが、大学生との練習試合の中で攻撃や守備のコンビプレーを確認し事前合宿を終えました。

集合日当日の 23 日は、全員元気に大同大学に集合し、練習ゲームを行い宿舎入りしました。24 日大会初日は地元愛知選抜との一戦。前半を 16 対 18 と 2 点差をつけられ終了しました。後半に入っても愛知選抜の勢いは衰えを知らず後半 6 分に最大 7 点差がつき負けを覚悟しました。すぐさまチームタイムアウトをとり戦術の確認や修正点を指示し、流れを変えようとしました。その後、驚異的な粘りを見せ、最終的には 32 対 32 の引き分けに持ち込みました。確かに、日本はチームとして機能していなかった面も多々ありましたが、愛知選抜の勢いにはすばらしいものがありました。25 日は中国戦でした。ゲーム前には大房コーチの粋な提案で、けがのため愛知選抜との試合に出ることができなかった田中選手を『ゲームに出場させ、7mT を成功させる』ことをチームの合い言葉に臨みました。昨日のゲームを引き分けて落ち込んでいた選手に、この提案は彼らの気持ちを一つにしてくれるには十分でした。それぞれの思いのこもったプレーで、後半ついに田中選手の出番がありました。見事に 7mT を決め、明日の韓国戦に対するモチベーションの向上につながりました。結局そのゲームは 32 対 24 と中国に完勝し、そして、最終日は 5 連覇をかけての宿敵韓国との戦い。やはり意識するなと言っても無理だったのか、力が入ってシュートをバーに当てたり、簡単なデフェンスミスで失点。前半を 14 対 19 の 5 点差を背負っての折り返しになりました。特に前半途中最大 7 点差をつけられた場面では、愛知選抜との戦いが頭をよぎり、悪い流れにベンチも動揺しました。私も流れを変えようとタイムを取り選手を落ち着かせるのが精一杯でした。ハーフタイムでは総監督の越石部長や大房コーチに叱咤激励を受け、前半の内容が嘘のように後半 9 分までに連続 5 得点をあげ、さらには、11 分に竹中選手のロングやキャプテンの東江選手のカットインなどでついに韓国をとらえ、逆転に成功しました。その後一進一退が続いたのですが、最終的には 35 対 33 と 2 点差で勝利を収め、念願の 5 連覇を果たすことができました。

最後になりましたが、この大会に関わってはたくさんのハンドボール関係者にお世話になりました。選考会費用や事前合宿費用をご負担いただき、なおかつ当日は会場まで応援に駆けつけてくださった保護者のみなさん、国体ブロック予選前にも関わらず選手を派遣くださった所属チームのみなさん、4 月の選考会では毎年のようにご協力いただいている大阪高体連のみなさん、事前合宿では塩谷前部長、東海・日体・中央・大同の各大学にもお世話になりました。そして、何と言っても今大会を運営していただいた愛知県協会、愛知県高体連の皆様方にこの場をお借りして感謝申し上げ結びとします。ありがとうございました。

第 19 回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

日本選手団男子主将・興南高校　東江 雄斗

僕は、昨年、今年と 2 年連続で日・韓・中ジュニア交流競技会に出場することができ、とても嬉しく思います。昨年は、4 連覇のかかったなか、危なげなく優勝し、僕もチームに微力ながら貢献できたかなと思いました。そしてなによりも、憧れ・素晴らしい先輩方と一緒にプレーが出来て、最高な気持ちでした。

そして今年は、5 連覇がかかり、しかも日本開催という最高の舞台でプレーができて大変幸せでした。

地元愛知県選手団も参加し、日本、韓国、中国の 4 チームでの戦いでした。初戦の愛知県選抜チームとは、初戦ということもあったのか、みんな自分の持ち味を発揮できず、リードされる展開から終盤で追い付き引き分けとなりました。勝てなかったのはとても悔しかったのですが、まだ試合が 2 試合残っているので、気持ちを切り替えて臨むことを心掛けました。次の中国戦は、相手の荒々しいプレーにも負けずに全員が出場し得点して勝つことが出来ました。最終戦の韓国との試合は、前半 DF が上手く機能しなかったのですが、どうにか守り抜いて速攻につなげました。しかし、完全なノーマークシュートを相手 GK に当てたりして波に乗れず 5 点リードされ終了しました。後半は、前半のミスを上手く修正して、逆転し優勝することができました。大接戦でしたが、とても楽しくプレーできました。

なんとか、5 連覇を成し遂げることが出来て、ホッとしています。また、韓国は、判定に対して不服を言って試合を中断するなど国際大会でしか味わえない体験ができ、とても貴重な大会でした。

この大会を通して得た経験を活かし、更なるステップアップを目指したいと思います。

おわりに、越石団長はじめ國府監督・スタッフ・選手のみなさんには主将としてご迷惑をお掛けしましたが、心温まる叱咤激励を頂き感謝いたします。ありがとうございました。

第19回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

桃山学院高等学校　西塚 一平

私にとってこういった代表に選ばれるということは初めての経験であり、憧れの舞台に立てるという喜びの反面、伝統ある日韓中代表選手として選ばれたという重責が、不安も入り混じった心境にさせました。しかし、屈指の強さを誇る東海大学、日本体育大学、中央大学といった大学チームとの練習試合で、初めはバラバラであった代表チームも次第に結束力が芽生え、キャプテン不在の中、私自身キャプテン代理という立場で練習に参加し、とてもいい経験になりました。

初戦の愛知戦では、チームの士気が上がらないまま前半終了を迎え、後半に入っても7点差まで離されてしまいましたが、ディフェンスで声を出し合ってリズムを掴み、何とか同点まで追いつく事ができました。試合終了後、國府監督、大房コーチから熱い指導を受け、宿舎でのミーティングで反省すべき点を出し合いました。2戦目の中国戦では、体の大きい選手に対してスピードで対抗し、また愛知戦での反省を十分に活かし、快勝することができました。そして迎えた3戦目、優勝をかけた韓国戦では、相手の高い身体能力と技術に苦戦しながらも粘り強い気持ちを持って徐々に日本のペースに持ち込み優勝することができました。厳しい試合ばかりでしたが、代表の仲間たちと共に制し、念願の5連覇を果たせたことが、何より嬉しかったです。その後の各国代表の親睦を深めるべく行われたフレンドシップ交流会では、様々な催し物があり、とても有意義な時間を過ごすことができました。

日・韓・中ジュニア交流会を終え、私自身一選手として普段とは違った緊張感や感動を経験できたことがとても刺激的で、心身共に大きな進歩を遂げることができたと実感しています。最後に、お世話になったスタッフの先生方やその他支えてくださった多くの方々には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この貴重な経験を、今後の人生で十分に発揮していけるよう日々努力していきたいと思います。ありがとうございました。

女子チームの声

第19回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

女子監督　田中 宏明（全国高体連専門部副委員長）

8月26日対韓国戦、思ったより点差が開き、試合終了。「優勝させてあげたい」と思う気持ちとはうらはらに結果2位となってしまいました。

4月中旬の選考会、39名の選手が集まり、14名の選手を最終選考、大阪高体連にご協力いただき、男女同会場でお互い刺激し合った選考会でした。各地区の国体ブロック大会と標記大会が重なり、また、4月中旬は、各県の全国総体予選も始まり残念ながら選考会に参加できない選手もある一方で、この機会をどう活かすのかが、課題でした。

今年度より、全国高体連の強化委員である洛北高校の楠本先生にご指導いただき、同副委員長の田中で「女子高校選抜」を結成することになりました。前スタッフの四天王寺高校繁田先生のご指導を仰ぎながら、現スタッフがスタートしました。

8月4日に岩手インターハイを終えて、8月7日～9日の事前合宿に入り、各大学との練習試合を経験します。佼成学園女子高校に日女体大・日体大、また東女体大での韓国体育大学をも含めての練習試合等、1試合、ハーフを経験するたびに成長する選手たちに感動を覚えました。また、東京選抜・関係者の方々にご協力いただき、審判・運営等この合宿を成功させようとご尽力いただきました。対戦していただいた大学チームの関係者の方に選手移動まで手伝っていただき、万全の体制で合宿を終えることができました。

8月23日、事前合宿から10日以上経過し、集まった高校選抜が事前合宿の良いムードを持続できるかと不安を抱えながらも、「この大会で優勝をする」と選手は、意気揚々と試合に臨みました。

初戦愛知県選抜、立ち上がりから心配していたこともなかったかのごとく、事前合宿の良いムードで前半が終了。後半は、愛知選抜のロングシュート・ポストプレー等巧みな攻撃を受けますが、快勝。2日目中国戦、ディフェンスから速攻で前半から好調なリズムが、試合終了まで続きます。愛知選抜対韓国のDVDを分析しながら、ミーティングを終了。3日目韓国戦、朝食時より選手たちは、気合い十分。立ち上がり、3点リードで良いリズムでしたが、シュートがゴールポストへ再三当たり、速攻を含め、6連続失点。タイムアウトで、ディフェンスをたて直そうとするも、なかなかリズムがつかめず後半へ。なんとかリズムを取り戻したものの、前半の得点差を追いつくことができませんでした。

愛知県名古屋市中村スポーツセンターで開催された本大会、会場の設営・運営等を地元高校生、指導者、愛知県協会、高体連等たくさんの役員の方々に支えていただきました。また、観戦に来られた人が多く、3日間会場全体約80％以上の観客数でありました。

選手スタッフ共々、たくさんの方々に支えられて、チーム選考から、事前合宿、大会と参加させていただいたことは、選手には、これからの大きな財産となると信じております。これからもご支援ご配慮のほどよろしくお願いいたします。

日・韓・中ジュニア交流競技会を通して感じたこと

日本選手団女子主将・洛北高等学校　笠原 有紗

私は、第19回日韓中ジュニアスポーツ交流競技会ハンドボールの部代表選手の一人として今大会に参加させていただきました。

韓国、中国と試合をさせていただいた感想は、両チームともとても体格がよく、プレーにパワーがあるということです。それに勝つためにはチーム力が必要不可欠であると痛感しました。今回のチームは選抜チームだったため練習時間も少なく、その少ない時間の中でも田中監督、楠本コーチの的確なご指導の下、チーム全員が一つになって全力をつくして試合に挑みましたが、韓国チームの気迫とパワーに勝つことができず、とても悔しい思いをしました。試合には負けてしまいましたが、チームで勝つために大切なことや、自分の課題も見つけることが出来たので本当によかったと思います。

普段はライバルである皆と一緒にプレーすることは滅多にない経験であり、大きな期待と緊張感、楽しみがありました。レベルの高いプレーヤーと一緒に練習や試合をさせていただく中で、自分も負けていられないと向上心が湧き、いつも以上にプレーに集中することができました。きっとチームメイト全員が同じことを感じていたと思います。そういう意味でもこのような機会に恵まれてプレーできたことは意義があることだと思うし、またとても魅力を感じられました。自分にとってもすごくプラスになったし、貴重な経験をさせていただけたことに深く感謝し、今後のハンドボール生活に活かしていきたいと思います。

違う国々の選手がスポーツを通じて触れ合うことができるのはとても素晴らしいことであり、スポーツをすることで感じられる達成感や感動はどの国でも共通なものだと嬉しく思いました。

最後にこの大会を通じてお世話になりました大会関係者の皆様や団長、監督、コーチの先生方、本当にありがとうございました。

第19回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

埼玉栄高等学校　石井 優花

第19回日日・韓・中ジュニア交流競技会で愛知県選抜・中国・韓国と試合をしました。

初戦の愛知県選抜との試合では、相手のロングシュートやポストプレーに苦しめられる場面もありましたが、一人一人がやるべきことをやり、楽しんで試合が出来たと思います。そして、勝利を収めることが出来ました。8月の合宿が終わってから日にちが空き、久しぶりに同じメンバーで合わせてみたところ、最初はなかなか合わない部分もありましたが、試合の中で徐々に修正出来たことが良かったと思います。

2日目は中国との試合でした。中国は身長が高く、やりにくいところもありましたが、守って速攻のスタイル、DFは当たって守るということが出来ていたし、何より走って点数を取るということが出来たので、勝つことが出来ました。

そしてついに3日目は韓国との試合でした。日本の女子チームは過去に一度しか勝ったことがなく、今回絶対に勝ちたいと思い、みんなで気持ちを一つにして試合に臨みました。しかしながら、韓国チームは一人一人の技術が非常に高く、スピードもあり、私たち日本チームは思うようなハンドボールが出来ませんでした。結果的には12点差で負けてしまいましたが、スピード、パスの速さ、プレーの正確性、体の強さなど、韓国チームから学ぶべきことが沢山あり、試合が出来て本当に良かったと思います。また、ハンドボールだけではなくフレンドシップ交流会では、韓国・中国の選手と交流が出来、とても楽しかったです。

私は日本代表チームとして、メンバーの14人と出会えたこと、そして、そのメンバーと一緒にハンドボールが出来たことを誇りに思います。今大会を通じて学んだ沢山のことを、これから先に生かして行きたいです。

最後になりましたが、総監督、監督、コーチ、大会関係者の多くの方々のサポート、ご支援をいただいたことに心より感謝申し上げたいと思います。この感謝の気持ちを忘れず、夢に向かってハンドボールを続けていきたいです。

技術と心の交流　小学生日韓交流　―第３回日韓小学生親善交流会を終えて―

（財）日本ハンドボール協会小学生委員長　山本　繁

8月22日（月）から26日（金）まで、愛知県東海市において『第３回日韓小学生ハンドボール親善交流会』が開催されました。一昨年の第１回は、韓国チームが来日し京都府と富山県で交流しました。昨年の第２回は、韓国河南市に京都府男子チームと富山県女子チームを派遣し交流を深めました。

今回は第３回目となり、愛知県東海市で受け入れていただきました。昨年度全国大会女子優勝の東海ハンドボールスクール、同じ東海ハンドボールスクールの中学１年生チーム、そして小学生愛知選抜のそれぞれ男女チーム合計６チームが集まり、練習会や交流ゲームをしました。今回も練習会の講師は、韓国チームコーチ達にお願いし、

①サイドステップを中心としたディフェンスのフットワーク（かなりハードでした）
②１対１、ポスト付きの１対１（２対２）
③ワンマン速攻

を中心に指導していただきました。

交流ゲームは、いつもながら体格と投力、ステップワークに勝る韓国チームがすべてのゲームで勝利しました。特にも、

①常に１対１を抜こうとするフェイント
②ポストプレーを常に意識した攻め
③基礎練習に裏付けされたディフェンス、フットワーク
④ゴールキーパーの巧さ

が、試合を決定付けていたように感じました。それでも、日本の子供達も随所に切れのあるコンビネーションを見せ、白熱した試合も多くあり見応えある交流ゲームでした。

試合以外では、身振り手振りで会話が弾み、日本と韓国の子供達が入り交じった小グループで行動を共にし、ハンドボールの技術面はもちろんのこと、心の交流もたくさんしました。今回の親善交流会は、子供達やスタッフから硬さや緊張といったものがやや薄れ、本当の交流になったような気がしました。『国際試合』としての硬さなのか、海外旅行的な緊張なのか、子供同士やスタッフ相互の会話がなかなか進まなかった今までとは違い、言葉が通じないながらも、お互いに心を通わせようとする子供達の姿に感銘を受けました。その姿勢や雰囲気は、そのまま練習会や交流試合にも表れ、中身の濃い技術練習や白熱したゲームとなり、お互いに大変大きな刺激となりました。

また、今回も日本の子供達の態度のすばらしさにも感動しました。節度ある態度、ハンドボールへの真剣な姿勢はもとより、キャプテンが率先して昼食弁当の後始末やゴミ拾い、両面テープのお世話、懇親会等でのエスコート役などなど、大人顔負けの態度でした。日頃の指導の賜であると感じました。ハンドボールを通した人間教育の理想像を見させていただきました。

このように成果の大きかった第３回親善交流会。韓国・日本共に、この交流を大事したいという気持ちを強く感じました。今後も、この事業を大切に育てていきたいと思います。

戦績

日　時：平成 23 年８月 22 ～ 26 日
場　所：東海市市民体育館
交流試合（試合時間 15 － 10 － 15）
〈男子〉
韓国（仁川富平南初等学校） 22（10 － 2 ／ 12 － 3） 5　愛知県選抜
韓国（仁川富平南初等学校） 23（11 － 4 ／ 12 － 4） 8　東海ハンドボールスクール
韓国（仁川富平南初等学校） 19（9 － 9 ／ 10 － 6）15　東海ハンドボールスクール U-15
〈女子〉
韓国（唱原八龍初等学校） 28（13 － 1 ／ 15 － 3） 4　愛知選抜
韓国（唱原八龍初等学校） 16（7 － 2 ／ 9 － 3） 5　東海ハンドボールスクール
韓国（唱原八龍初等学校） 12（4 － 5 ／ 8 － 5）10　東海ハンドボールスクール U-15

東海ハンドボールスクール　濱野 健一

今回、8 月 22 ～ 26 日に愛知県東海市において、第３回日韓小学生ハンドボール親善交流会が開催されました。韓国選手団は団長をはじめ８人のスタッフと男女各 14 名の選手で構成され、男子は仁川富平南初等学校、女子は唱原八龍初等学校のチームが来日しました。男女とも５月の全国大会で優勝したチームで、共に仁川市の小学生です。

交流においては、まず 22 日にお迎えし選手を見て、その大きさに驚きました。殆どの選手が 160 ㎝クラスで、見ただけで分かる鍛えられた足も印象的でした。そんな選手に対する東海ハンドボールスクールの選手達は、体格では全く歯が立たない状態。合同トレーニングでもフットワークの差は歴然でした。そんな見た目の差がある選手ですが、初日のウェルカムパーティーでは、スタートから仲良く会話。小学生という歳も関係しているのでしょうか、お互いの言葉も分からないのに、ジェスチャーを使って仲良くなっておりました。子供達の可能性を感じた瞬間でした。スタッフについても、初日から堅苦しい雰囲気はなく、交流できる事を楽しんでおりました。

23、24 日の２日間は、午前中は合同トレーニング。午後からは交流試合を行うスケジュールで進みました。交流試合においては、愛知選抜小学生チーム、東海ハンドボールスクール小学生チームと中学生チームがそれぞれ対戦しましたが、韓国チームのスピードとテクニックが上回り、韓国チームの全勝という結果となりました。韓国チームは大きさがあるためか、６－０DF でした。合同トレーニング中の DF 練習でもポストを意識する練習が多く、徹底された内容であったと感じました。また、フェイントについては、以前ほどゼロキャッチステップにこだわっていない点が新たな発見でした。

今回の親善交流会を総括して、子供達の社交性は素晴らしいものがあります。しかしながらスタッフは言葉が通じないなどの壁もあり、コミュニケーションに苦慮いたしました。これから、ハンドボール界を背負って立つ子供達は当然、我々スタッフの語学力強化はとても重要な事だと思いました。

最後に今回このような貴重な体験をさせて頂いた、日本協会の皆様ならびに、本交流会にご尽力を賜りました皆様へ感謝しております。今後もこのような貴重な経験をした子供達が、未来のナショナル選手へ育ってくれる事を期待しております。

東海ハンドボールスクール男子主将・清水 裕大

初めにこの様な会を開いて頂いた皆様に感謝します。ありがとうございました。

僕は、初めに韓国の小学生に会った時、自分たちより背が高く、パワーもありそうだなと感じました。そして対戦してみると思った通り、パワーもスピードもあり「やはり全国１位になったチームは凄いな」と思いました。

結果は大差で負けてしまいました。悔しさもありましたが、良い経験をさせてもらい良かったです。韓国チームとの合同練習ではフェイントステップからディフェンスまで、さまざまな練習をしました。その時教えてもらったディフェンスの動きをその後も練習を続け、数週間たった最近になりようやくできるようになりました。もっと練習して、他のプレーもできるようにしたいと思います。

来年は、韓国でこの親善交流会が開かれます。来年韓国へ行く選手の皆さんも感謝の心を忘れずに、今年以上の良い経験をしてほしいと思います。

東海ハンドボールスクール女子主将・蓮尾 つかさ

８月22日から26日の５日間、韓国の代表チームと国際親善交流会がありました。初めて選手の皆さんとお会いした時は、思っていたより体が大きくがっしりしていて、同じ小学生とは思えませんでした。韓国語も英語も殆ど話せない私たちは、仲良くなれるか心配でしたが、実際に会ってみると身振り手振りのジェスチャーと英単語で直ぐに打ち解け、仲良くなれました。

交流戦では、スピートもパワーも私たちよりレベルが高く、大きな差を感じました。合同練習でも練習の厳しさを感じ、私たちも練習を頑張り、少しでも韓国チームに近づけるように頑張りたいと思いました。

観光ではハンドボールを離れ、とても楽しい時間を過ごす事ができ、貴重な経験ができました。ハンドボールから、観光まで共に過ごした選手と「またいつか一緒にプレーできると良いね」とがっちり握手を交わし、再会を誓いました。

短い間でしたが、韓国チームと交流して学んだプレーや色々な思い出を忘れない様にして、これからのハンドボール人生に生かしたいと思います。ありがとうございました。

～熟年JHL
盛り上げよう～

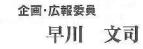
企画・広報委員
早川　文司

日本リーグが開幕した。今回で36回目を数える。山口国体後の10月29日にまず女子がスローオフ。続いて11月12日から男子が始まる。

1965年、今や世界の強豪国に仲間入りした感のあるサッカーの日本リーグがスタートしたのをきっかけに、各競技で流れができた。ハンドボールは1976年、男女各８チームで誕生した。そして４年後には2部も続いた。第１回から現在まで加盟しているのは、男子では大同特殊鋼、湧永製薬、大崎電気の３チーム。女子はオムロン（立石電機）とHC名古屋（ブラザー工業）だけで、時代の変遷を感じる。しかも１、２部制時代を通して１部で戦っているのは湧永製薬とオムロンだけ。古豪の意地を見せてくれていると言ってもいいかも知れない。

その日本リーグ、早いもので“熟年”の域に達している。“熟年”とは広辞苑によれば「人生の経験を積み円熟に達した年ごろ」とあり、言葉が生まれたのは1970年後期という。ハンドボール日本リーグと同じような歩みと言える。

今回はどのような新鮮な戦いを繰り広げてくれるだろうか、楽しみは果てしない。

一方で課題が多いのも事実である。その中でなんとしても寂しいのが観客の動員数だ。サッカー女子のワールドカップで初優勝し、一気に人気が出てきたなでしこジャパンのリーグには、優勝後に大勢のファンが詰めかけ、さらにはテレビ放映さえも実現した。なんともうらやましい限りである。

観客増は永遠のテーマにさえなった感がする。関係者の努力は並大抵ではないが、なかなかファン増につながらない。その理由の一つに考えられるのが、日本の二大都市圏である東京と大阪にチームが存在しないことが挙げられるのではなかろうか。大都市から発信される「情報力」は、やはり大きなエネルギーだ。メディアの関心も当然ながら違う。いくら地方都市でアピールしても、そのパワーは比べようがない。願わくばこの大都市からリーグ加盟を実現したいものである。

言い替えれば、東京、大阪で試合の観戦がない（あるいは少ない）と言うことは、それだけファンの目に触れる機会が少ないということにつながる。いくら選手が熱いプレー、熱い戦いをしても、観客数が少なくては、巷の話題になるチャンスも限られる。

選手たちはファン開拓に協力、貢献している。だが、アピール度をどのように盛り上げていくかのアイデアはまだ乏しい。メディアが色めき立つようなイベントの企画が重要ではないかと思う。せっかくのプレーが寂しく沈んでいったのでは悲しい。観客増は今回のリーグで開催地関係者の腕の見せ所でもあろう。

第９回ハンドボールコーチング研究会は、平成 23 年３月 12 日駒澤大学において開催が予定されていましたが、前日の３月 11 日に大震災が発生したことにより中止となりました。

そこで研究会で発表予定であった内容については、本誌で連載報告していただく運びとなりました。

今月は東俊介氏（大崎電気）の発表内容「ハンドボールにおける基本プレイ・アルゴリズム構築に関する研究」を報告させていただきます。なお、他の発表については次号以降で報告を連載いたします。

(財) 日本ハンドボール協会指導委員会研究部会　舎利弗　学（学校法人福島高等学校）

ハンドボールにおける基本プレイ・アルゴリズム構築に関する研究

—セットオフェンスのコンセプトとプレーの継続性について—

東　俊介（大崎電気）　清水 宣雄（国際武道大学）

キーワード：ハンドボール、セットオフェンス、作り、仕掛け

1．はじめに

ハンドボールを含む攻防のプレーヤーがコートに混在するゴール型球技においては、ゲームを大きく４つの局面に分類することが出来る。すなわちボールを獲得することによる「1．防御から攻撃への移行」、「2．組織的攻撃」、ボール喪失による「3．攻撃から防御への移行」、「4．組織的防御」であり、ハンドボールにおいてはこれらの局面を「1．速攻」、「2．セットオフェンス」、「3．速攻の防御」、「4．セットディフェンス」と分類することが出来る。

大西（1997）はこれら４つの局面のうち、「セットオフェンス」をさらに５つの局面に分類した。すなわち「1．位置取り」、「2．きっかけ」、「3．展開」、「4．突破」、「5．シュート」である。また、これらの局面の中で「きっかけ」と「突破」が特に重要であるとし、「きっかけ」が不十分なままプレーを継続すれば、防御側に有利な展開となる場合が多いと述べている[1)]。

本研究は、ハンドボールにおける「型」の創設を目的とし、柔道における「型」を参考にすることでハンドボールのセットオフェンスの局面における基本プレー・アルゴリズムを構築。セットオフェンスにおけるコンセプトの一考察を示したものである。

2．柔道におけるオフェンスのコンセプト

柏崎（1991）が述べているように、柔道においては、昔から相手を投げるまでの過程を「崩し」、「作り」、「掛け」という３つの局面に分類している[2)]。

相手と組み合い、手足を巧みに働かせ、体勢を崩していく局面を「崩し」、投げるための技を施しやすい様、身体を移動させる局面を「作り」、体勢を崩した相手に安定した体勢で技を施す局面を「掛け」と呼び、「崩し」から「作り」に移行し、十分な「掛け」を行えば「投げ」に進展することが出来るが、「掛け」が不十分な場合には「掛け」を連続するか「作り」、「崩し」に戻り、十分な「掛け」を行い「投げ」に至るまで繰り返すこととなる。これら柔道におけるオフェンスのコンセプトをハンドボールに応用することとした。

3．セットオフェンスのコンセプト

図１はハンドボールにおけるセットオフェンスのコンセプトのフローを示したものである。

本研究ではセットオフェンスを「作り」、「仕掛け」、「合わせ」、「シュート」の４つの局面に分類し、それぞれ以下の様に定義した。

（1）「作り」

コートバランスに配慮しながら、各ポジションのプレーヤー間でボールを回し、攻めるスペースの有無を判断しながら「シュート」、「突破」を狙って動いている局面。ボールを放した直後にも「仕掛け」及び「合わせ」が可能な位置取りを基本とする。

（2）「仕掛け」

防御の隙を突き、攻撃を仕掛ける局面であり、「シュート」

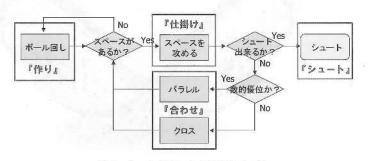



図１　セットオフェンスのコンセプト

及び「突破」のためゴールとの間合いを詰めている状態。「仕掛け」の局面においてはゴールとの間合いを詰めているが故に「シュート」、「突破」に至らずボールを放した直後には「仕掛け」及び「合わせ」ともに不可能な位置取りとなる。

(3)「合わせ」

「仕掛け」の結果、防御の反応が十分で、「シュート」が不可能な場合に、他のポジションのプレーヤーが「仕掛け」を行ったプレーヤーに合わせて更なる「作り」及び「仕掛け」を展開できるよう位置取りを行う局面。「仕掛け」を行ったプレーヤーに対して平行の位置で合わせる「パラレル」とポジションを入れ替えた位置で合わせる「クロス」の動きがある。なお、「仕掛け」を行ったプレーヤーが自らをマークする防御プレーヤーを突破し、他のプレーヤーをマークしていた防御プレーヤーが自らをマークする数的優位の状況を作り出せている場合には「パラレル」を、突破するには至らず、数的優位の状況を作り出せていない場合には「クロス」を選択することで、「シュート」の局面に至るチャンスを狙う。

(4)「シュート」

「仕掛け」の結果、防御の反応が不十分で、「シュート」が可能な場合は、そのまま「シュート」を試みる。ハンドボールにおいてはごく特殊な場合を除き、「シュート」以外に得点を獲得出来る局面はない。すなわちどれだけ良い「作り」、「仕掛け」、「合わせ」を行っても「シュート」が成功しなくては得点することが出来ず、勝利に近づくことはない。したがって、これまで述べてきた「作り」、「仕掛け」、「合わせ」の局面は全て「シュート」の局面に至るためのものであり、ハンドボールが時間内に相手よりも多く得点することを目的としている事を考慮すると、セットオフェンスにおいて最も重要な局面であるといえる。

4. セットオフェンスにおける継続性と意外性

セットオフェンスにおいて前述のフローを経て、「シュート」の局面に至り、得点を獲得するためには継続性と意外性が重要である。

(1)「セットオフェンスにおける継続性」

「作り」の局面を維持し続けることが出来れば、防御プレーヤーによるボール喪失の危険は減少し、セットオフェンスを継続して、得点のチャンスを伺うとともに失点の機会をなくすことが可能である。しかし、現行ルールである「ハンドボール競技規則 2010 年度版第 7 条 ボールの扱い方、パッシブプレー」の 7 の 11 における「攻撃しよう、あるいはシュートしようという意図を示さないで、チームがボールを所持し続けることは許されない。同様に、自チームのスローオフやフリースロー、スローイン、ゴールキーパースローの実施を、繰り返し遅延することも許されない。このようなパッシブプレーの兆候が続く場合には、パッシブプレーと見なし、相手チームにフリースローを判定する」及び 7 の 12「プレーヤーが明らかな得点チャンスを意図的に放棄するなど、特定の状況において、レフェリーは前もって予告合図を出していなくても、相手チームにフリースローを判定することができる」[3] に記載されている通り、ボールを回しながら防御の隙を伺う「作り」の局面から積極的な攻撃局面である「仕掛け」に移行しなければ、レフェリーにパッシブプレーと判断され、「シュート」に至ることなくボールを喪失してしまうこととなり、セットオフェンスを継続することは出来ない。

(2)「セットオフェンスにおける意外性」

前項において述べたとおり、パッシブプレーによるボール喪失を避け、セットオフェンスを継続するためにはレフェリーに「シュート」を狙い、「仕掛け」、「合わせ」を行っていることを印象づけなければならない。そのために必要とされるのが積極性と意外性である。ただし、いくら積極性があっても、意外性がなければ防御の隙をつく事は容易ではなく、「シュート」に至り、得点を獲得することは困難である。

セットオフェンスにおいて、レフェリー及び防御に意外性を示す方策の一つとして、ボール及びプレーヤーの流れる方向を切り替えること、すなわち「切り返し」が挙げられる。

5. セットオフェンスにおける切り返し

本研究では、セットオフェンスにおける「切り返し」の方法を分析し、1.「Hold」、2.「Wall」、3.「Reverse」、4.「Cross」、5.「Counter」の 5 つのパターンに分類した。

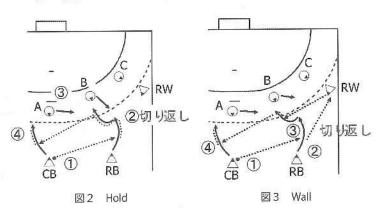
(1)「Hold」(図2参照)

①センターバックプレーヤー(以下 CB)が右バックプレーヤー(以下 RB)にパスを出す。(「作り」)

②パスを受けた RB はボールの流れのままに右ウイングプレーヤー(以下 RW)にパスを出すのではなく、逆方向に切り返し、自らをマークしている防御 B を突破する。(「仕掛け」)

③防御 B が RB に突破されたため、防御 A が RB をマークする。

④自らをマークする防御 A が RB に引き付けられ、数的優位の状況になったことを受けて、CB は「パラレル」の動き

図2 Hold　　図3 Wall

で「合わせ」を行う。(「合わせ」)

①において、CB が「仕掛け」の局面で RB にパスを出した場合には、RB の切り返しからのパスに対する十分な位置取りが出来ず、防御との間合いが近すぎる状況になってしまう場合が多いため、「合わせ」及び「仕掛け」を行う事は難しい。

(2)「Wall」(図３参照)

① CB が RB にパスを出す。(「作り」)

② RB が RW にパスを出す。(「作り」)

③ RB は防御 B と防御 C の間の突破を狙うと見せかけ、防御 B を防御 C 側に引き付けておき、RW からパスを受け取る前に逆方向に切り返し、防御 B と防御 A の間で RW からパスを受け取り、突破を狙う。(「仕掛け」)

④ RB の突破に対して、自らをマークする防御 A が RB に引き付けられ、数的優位の状況になったことを受けて、CB は「パラレル」の動きで「合わせ」を行う。(「合わせ」)

②において、RB が「仕掛け」の局面で RW にパスを出した場合には、防御 B との間合いが近すぎる状況となり、③において意外性に欠けた「切り返し」となってしまうことが多いため、「合わせ」及び「仕掛け」を行う事は難しい。

③ではパスを貰う前に「切り返し」を行うことが重要である。パスを受け取る前に「仕掛け」を行い、防御 B と C の間を突破すると思わせておいて、RW からパスを受け取る瞬間に防御 B と防御 A の間へ「切り返す」ことで意外性のある効果的な攻撃となる。すなわち、②の「作り」から③の「仕掛け」へ移行する際の緩急と RW からパスを受け取るタイミングが成功のポイントといえる。

(3)「Reverse」(図４参照)

① CB が RB にパスを出す。(「作り」)

②パスを受けた RB は防御 B と防御 C の間のスペースの突破を狙う。(「仕掛け」)

③ RB はボールの流れのままに RW にパスを出すのではなく、逆方向である CB にパスを切り返す。

④ CB はボールの流れのままに防御 A の向かって左側のスペースの突破を狙うのではなく、逆方向に切り返し、RB が防御 B を引き付けたことによって広がった防御 A と防御 B の間のスペースの突破を狙う。(「合わせ」)

「Hold」と同様、①において、CB が防御 A の向かって右側に対して「仕掛け」を行い、RB にパスを出した場合には、RB のパスに対する十分な位置取りが出来ず、防御との間合いが近すぎる状況になってしまうとともに、防御 A と防御 B の間のスペースを十分に広げられない場合が多いため、効果的な「合わせ」及び「仕掛け」を行う事は難しい。ただし、①において CB が防御 A の向かって左側のスペースに対して「仕掛け」を行うことは、防御 A と防御 B の間のスペースをあらかじめ広げておく意味では効果的であるともいえる。

(4)「Cross」(図５参照)

① CB が RB にパスを出す。(「作り」)

②パスを受けた RB は防御 B と防御 C の間のスペースの突破を狙う。(「仕掛け」)

③ RB の突破に防御 C が引き付けられておらず、数的優位の状況となっていないため、RW は「クロス」の動きでボールの流れと逆方向に切り返し、「合わせ」を行う。(「合わせ」)

この時、RW は防御 B と防御 C の間ではなく、防御 B と防御 A の間のスペースの突破を狙うようにする。

④ CB は RW の「クロス」による切り返しからの突破により、防御 A が防御 B 側に引き付けられ、広くなった防御 A の向かって左側のスペースの突破を狙う。(「合わせ」)

②において、RB が防御 C を引き付けられた場合には、数的優位の状況が出来ているため、RW は「パラレル」の動きで「合わせ」を行い、右サイドのポジションより「シュート」を行う。

(5)「Counter」(図６参照)

① CB が RB にパスを出す。(「作り」)

②パスを受けた RB は RW にパスを出す。(「作り」)

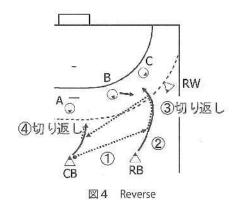
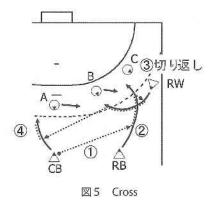
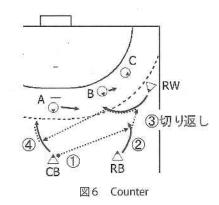
③ RW はパスを受ける前に、ボールの流れと逆方向に切り返し、自らのマークである防御 C ではなく、防御 B と防御 A の間のスペースの突破を狙う。(「仕掛け」)

④ CB は RW の切り返しからの突破により、防御 A が防御 B 側に引き付けられ、広くなった防御 A の向かって左側のスペースの突破を狙う。(「合わせ」)

②において RB が「仕掛け」を行った場合、RW の妨げと

図４　Reverse

図５　Cross

図６　Counter

なり、効果的な突破を行う事が困難となる。RB が「仕掛け」を行うのであれば、前述した「Cross」を選択することが効果的である。また、CB が①において防御 A と防御 B の間のスペースの突破を図ることは、防御 A を防御 B 側に引き付けておくことで、④における防御 A の向かって左側のスペースをあらかじめ広げておくという意味で効果的であるともいえる。

以上 5 つの切り返しのパターンにおいて重要なのは「作り」と「仕掛け」のバランスと「パラレル」と「クロス」の判断である。

前述のとおり、「作り」だけでは積極的なオフェンスとならないが、「仕掛け」ばかりでも意外性のある攻撃とならず、継続性を維持することは難しい。いずれの場合も効果的な「シュート」に至ることは困難であると考えられる。

また、「合わせ」においては防御に対して数的優位な状況をつくることが出来ているかを見極め、「パラレル」及び「クロス」を正しく選択することが必要とされる。

「作り」と「仕掛け」のバランスについては「プレーの緩急」、「パラレル」と「クロス」の選択については「状況判断」と置き換える事が出来る。

つまり、セットオフェンスにおいて積極性及び意外性を示すために行う「切り返し」は「プレーに緩急をつける」ことと「正しい状況判断」を行うことでより効果的になるといえる。

6. まとめ

本研究では、柔道におけるオフェンスのコンセプトを参考に、ハンドボールにおけるセットオフェンスのコンセプトを「作り」、「仕掛け」、「合わせ」、「シュート」の 4 つの局面に分類し、以下のように定義した。

1.「作り」とは、各ポジションのプレーヤー間でボールを回し、「シュート」、「突破」を狙って動いている局面であり、ボールを放した直後にも「仕掛け」及び「合わせ」が可能な位置取りが基本である。

2.「仕掛け」とは、「シュート」及び「突破」のためゴールとの間合いを詰めている局面であり、間合いを詰めているが故に「シュート」、「突破」に至らずボールを放した直後には「仕掛け」及び「合わせ」ともに不可能な位置取りとなる。

3.「合わせ」とは、「仕掛け」の結果、防御の反応が十分で、「シュート」が不可能な場合に、他のポジションのプレーヤーが「仕掛け」を行ったプレーヤーに合わせて更なる「作り」及び「仕掛け」を展開できるよう位置取りを行う局面である。「合わせ」の種類としては、「仕掛け」を行ったプレーヤーに対して平行の位置で合わせる「パラレル」とポジションを入れ替えた位置で合わせる「クロス」の動きがあり、数的優位の状況かどうかを見極めて使い分ける必要がある。

4.「シュート」
ハンドボールが時間内に相手よりも多く得点することを目的としているゲームである事を考慮すると、セットオフェンスにおいて最も重要な局面である。「仕掛け」の結果、防御の反応が不十分で、「シュート」が可能な場合は、そのまま「シュート」を試みる。

以上 4 つの局面をセットオフェンスの中で組み合わせ、「作り」、「仕掛け」、「合わせ」の局面から「シュート」に至り、得点を獲得するためには継続性と意外性が必要である。

セットオフェンスにおいて継続性を維持するためにはパッシブプレーと判定されないよう、レフェリーに積極性を見せなければならず、また、防御の隙をつき、効果的な攻撃を展開するためには積極性に加えて意外性が必要である。

本研究ではセットオフェンスにおいてレフェリー及び防御に意外性を示す方策の一つとしてボール及びプレーヤーの流れる方向を切り替えること、すなわち「切り返し」を挙げ、前述の「Hold」、「Wall」、「Reverse」、「Cross」、「Counter」の 5 つのパターンに分類し、重要なのは「作り」と「仕掛け」のバランス、すなわち「プレーの緩急」と「パラレル」と「クロス」の判断、すなわち「状況判断」であるとした。

実際のゲームにおいて、これらの局面及び切り返しはセットオフェンスのみならず速攻の場面でも実践されている。ハンドボールのゲームにおける攻撃の局面で、積極性及び意外性を示すために行う「切り返し」は「プレーに緩急をつける」ことと「正しい状況判断」を行うことでより効果的になる。

つまり、味方プレーヤー及び防御の状況を判断し、最も有効なプレーを選択することがセットオフェンスを含むハンドボールの攻撃の局面では重要だといえる。逆に防御は攻撃がプレーの継続性を維持できないような状況に、追い込むべきである。

本研究では、以上のように CB、RB、RW の 3 人による「切り返し」のパターンを考察したが、実際のゲームにおいて、どの様なプレーが有効であり、多用されているのか。チームによって違いがあるのかどうかを分析すること並びに左ウイングプレーヤー（LW）、左バックプレーヤー（LB）、ピボットプレーヤー（PV）を加えた「切り返し」や、スクリーンを交えたプレーの分析については今後の課題としたい。

7. 文献

1）大西武三（1997）ハンドボールのゲームにおける局面の構成について．筑波大学体育科学系紀要，20：pp.95-103.

2）柏崎克彦ほか（1991）柔道．ベースボール・マガジン社：東京.

3）ハンドボール競技規則 2010 年度版．日本ハンドボール協会.

審判部報告

平成23年度 全国中学校ハンドボール大会に参加して

愛媛県ハンドボール協会　田中　愛（愛媛県立松山東高等学校）　白石智子（愛媛県立三崎高等学校）

8月17日（水）から20日（土）の4日間、京都市において開催された全国中学校ハンドボール大会に参加させていただきました。今大会は3月11日に起こった東日本大震災の大きな爪痕が残る中、復興に向けた取組が進められている状況下で開催されました。被災地のブロックからも代表チームが参加しており、復興を後押しするという点でも、非常に大きな意味を持つ大会であることを念頭において参加しました。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り致しますとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

大会初日に審判会議が行われ、今大会におけるレフェリング上の留意事項の伝達および競技規則筆記試験がありました。会議では、罰則の基準やアドバンテージの見極めなどに加えて、応援のマナーについても取り上げられました。これは、選手の健康と安全を最優先に考えたもので、単に競技運営をスムーズにさせるためだけではなく、3年生にとって現チームで出場する最後の大会であり、その試合を吹笛するという重大な責任もあるということを再認識しました。

大会期間中は早朝のミーティングで審判割り当てが発表され、試合終了後のミーティングでご指導をいただくという流れで、内容の濃い3日間が過ぎていきました。私たちは女子の試合を合計3ゲーム担当しました。何ともいえない緊張感、そして全国各ブロックの激戦区を勝ち抜いてきたチームのレベルの高さに、ただただ圧倒され続けていました。1試合目は極度の緊張に加えて防御システムに対する理解が乏しく、お互いの基準にズレが生じてしまい、ベンチにも選手にもストレスを与えるようなゲーム展開となってしまいました。担当するゲームの前に他の審判員の方々のレフェリングを拝見させていただき、「違反プレーの見極めを徹底しよう」という共通意識を持って望みましたが、いざコートに立つと大切な試合を吹笛するという重圧に負けてしまっていたと思います。しかし、多くの方からの的確で温かいご指導をいただき、2試合目以降は何とか落ち着いて吹笛できました。中でも、ペア初の延長戦が全国大会という大舞台となり、プレッシャーとの戦いでしたが、「選手のために吹く」ということを第一に考え、オフィシャルとも意思疎通を図りながら、最後まで良い緊張感を持って吹笛に集中することができました。

今大会でさまざまな経験をし、ハンドボールの難しさやゲームにおけるレフェリーの重要性を改めて痛感しました。また、愛媛県では6年後に国体を控えており、それに向けて競技力はもちろん、レフェリーのレベルアップも必要不可欠となっています。そのためにも、自分自身がしっかりとルールを理解し、高いレベルのレフェリング技術を身につけ、ハンドボールという競技に関して日々研鑽に努めていきたいと思います。

最後になりましたが、今回は私たちペアにとって初めての全国大会であり、本当に多くのことを学び、非常に貴重な経験することができました。このような機会を与えていただいた関係の皆様に心から感謝しております。初心を忘れず、少しでも恩返しをしていけるよう、努力し続けてまいりますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。本当にありがとうございました。

医事委員会だより

NTS近畿ブロックトレーニングにおける栄養調査

現在、(財)日本ハンドボール協会主催の一貫指導であるナショナルトレーニングシステム(NTS)では、全国を9つのブロックに分け、それぞれの地域で小・中・高校生の選手育成に力を注がれています。

その中で、2011年8月27・28日に神戸夙川学院大学体育館にて行われた近畿ブロックトレーニング時における栄養に関する現状の把握、また今後の改善点を検討するため調査を行いました。

今回は、中高生を対象にトレーニングや当日のお弁当について見させて頂き、選手と直接話をする機会はありませんでした。

今後、またNTSのトレーニングに関わらせて頂く機会があれば、昼食時に栄養に関する話をするなど、もう一歩踏み込んだ食指導へつなげて行ければと考えております。

将来、世界で活躍できる日本代表プレーヤーに育成するというNTSの目的のためには食教育が必要不可欠であり、各ブロックの現状に合った対策が望まれます。

(財) 日本ハンドボール協会 医事専門委員会 栄養部門　村井美保子　佐久間克彦　坂本静男

スコアルーム①

第40回全国中学校大会

開催期日：2011年8月17日(水)～20日(土)
会　場：京都府京都市・ハンナリーズアリーナ

【男　子】

▼1回戦
鹿骨(東京) 32(10−15、22−13)28 三松(宮崎)
魚住(兵庫) 25(13−12、12−11)23 氷見南部(富山)
平田(山口) 34(17−8、17−7)15 豊中第九(大阪)
手代木(茨城) 31(18−10、13−14)24 白子(三重)

▼2回戦
鹿骨(東京) 30(13−8、17−11)19 綾南(香川)
西條(富山) 26(10−13、16−9)22 平田(山口)
平針(愛知) 25(9−7、16−7)14 魚住(兵庫)
培良(京都) 30(11−9、12−14)27 光成(北海道)
(7−4)
松橋(熊本) 23(13−9、10−9)18 はとり(愛知)
手代木(茨城) 28(11−10、17−14)24 矢巾(岩手)
西中原(神奈川) 29(12−12、17−8)20 総社西(岡山)
大体大附(大阪) 29(21−11、8−16)27 浦添(沖縄)

▼3回戦
鹿骨 34(19−12、15−15)27 培良
西條 31(16−12、15−14)26 松橋
平針 32(13−12、19−14)26 西中原
手代木 26(13−12、13−13)25 大体大附

▼準決勝
平針 34(16−15、18−12)27 鹿骨
手代木 36(19−6、17−10)16 西條

▼決勝
平針 29(15−9、14−14)23 手代木

【女　子】

▼1回戦
笹川南(三重) 28(16−4、12−8)12 本通(北海道)
夙川学院(兵庫) 25(11−6、14−7)13 岩国(山口)
中山(岐阜) 30(17−6、13−8)14 住吉第一(大阪)
西條(富山) 24(15−13、9−10)23 三郷北(埼玉)

▼2回戦
仲西(沖縄) 22(16−7、6−9)16 岐陽(山口)
松橋(熊本) 17(12−2、5−3)5 甘楽第一(群馬)
東久留米西(東京) 32(16−9、16−8)17 三松(宮崎)
郡山第一(福島) 23(11−9、6−8)21 培良(京都)
(3−3、3−1)
笹川南(三重) 21(13−9、8−10)19 大住(京都)
香川第一(香川) 21(11−8、10−9)17 夙川学院(兵庫)
氷見十三(富山) 25(12−9、13−8)17 中山(岐阜)
滝ノ水(愛知) 16(10−9、6−6)15 西條(富山)

▼3回戦
東久留米西 28(9−12、14−11)26 氷見十三
(5−3)
滝ノ水 29(15−8、14−7)15 郡山第一
松橋 21(14−6、7−5)11 香川第一
仲西 29(15−8、14−15)23 笹川南

▼準決勝
東久留米西 26(12−10、14−8)18 仲西
松橋 19(9−8、10−8)16 滝ノ水

▼決勝
東久留米西 21(10−9、11−11)20 松橋

スコアルーム②

第38回全国高等専門学校選手権大会

開催期日：2011年8月27日(土)～28日(日)
会　場：神奈川県川崎市・とどろきアリーナ

■予選リーグ第1ブロック
豊田高専 21(13−10、8−10)20 明石高専
豊田高専 21(13−10、8−7)17 東京高専
明石高専 27(14−10、13−11)21 東京高専

■予選リーグ第2ブロック
徳山高専 44(19−8、25−21)29 一関高専
徳山高専 31(15−16、16−12)28 熊本高専熊本
一関高専 32(14−18、18−13)31 熊本高専熊本

■予選リーグ第3ブロック
函館高専 27(16−10、11−14)24 富山高専本郷
函館高専 32(13−5、19−5)10 長岡高専
富山高専本郷 29(18−8、11−11)19 長岡高専

■予選リーグ第4ブロック
熊本高専八代 35(16−9、19−14)23 大阪府立高専
熊本高専八代 35(14−10、21−12)22 香川高専高松
大阪府立高専 25(12−10、13−15)25 香川高専高松

■準決勝
徳山高専 23(11−3、12−13)16 豊田高専
熊本高専八代 30(13−14、12−11)29 函館高専
(4−2、1−2)

■決勝
徳山高専 28(15−10、13−10)20 熊本高専八代

スコアルーム③

第13回全日本ビーチハンドボール選手権大会

開催期日：2011年8月27日(土)～28日(日)
会　場：兵庫県神戸市・「アジュール舞子」海岸特設コート

【男　子】

★予選Aブロック
H本体育大学(東京) 2(12−11、22−11)0 HC大阪(大阪)
FST(東京) 2(12−11、9−12)1 ボンチフェローズ(大阪)
(3−2)
FST(東京) 2(14−15、22−16)1 BHC新舞子(愛知)
(5−4)
FST(東京) 2(16−12、30−3)0 SOCIO大阪(大阪)
ボンチフェローズ(大阪) 2(22−14、17−12)0 BHC新舞子(愛知)
ボンチフェローズ(大阪) 2(15−14、17−12)0 SOCIO大阪(大阪)
BHC新舞子(愛知) 2(20−13、14−11)0 SOCIO大阪(大阪)

★予選Bブロック
H本体育大学(東京) 2(12−11、22−11)0 HC大阪(大阪)
日本体育大学(東京) 2(22−9、17−12)0 兵庫選抜(兵庫)
HC大阪(大阪) 2(19−7、20−13)0 兵庫選抜(兵庫)

★5・6位決定戦
BHC新舞子 2(16−12、20−17)0 兵庫選抜

★準決勝
ボンチフェローズ 2(13−12、10−8)0 日本体育大学
FST 2(11−16、13−10)1 HC大阪
(7−4)

★3位決定戦
H本体育大学 2(20−10、14−16)1 HC大阪
(7−1)

★決勝
ボンチフェローズ 2(13−7、12−11)0 FST

【女　子】

★予選Aブロック
風見鶏クラブ(兵庫) 2(11−8、9−6)0 東海Weeds!(愛知)
日本体育大学(東京) 2(11−3、7−6)0 あぶらおおめ(東京)
日本体育大学(東京) 2(9−5、7−8)1 風見鶏クラブ(兵庫)
(4−3)
あぶらおおめ(東京) 2(9−6、7−3)0 東海Weeds!(愛知)
日本体育大学(東京) 2(15−8、7−3)0 東海Weeds!(愛知)
あぶらおおめ(東京) 2(12−11、12−8)0 風見鶏クラブ(兵庫)

★最終順位
①日本体育大学(東京)
②あぶらおおめ(東京)
③風見鶏クラブ(兵庫)

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」9月入会・継続会員

【千　葉】相浦　美波　【東　京】平賀　とみ子　【神奈川】種村　明彦　【愛　知】禰津　行雄、田中　基明　高木　和裕、森脇　正貴、岡山　尚司、岡山　美恵子、西　みどり、牧野　千別　【大　阪】折橋　裕智　伊藤　慎吾　【広　島】青戸　克好　【熊　本】古庄　直也

【11月の行事予定】

【会　議】

11月12日(土)　常務理事会・第2回理事会（東京）

【大　会】

11月2日(水)～6日(日)

高松宮記念杯・男子54回、女子47回全日本学生選手権（岩手県・花巻市）

11月19日(土)～20日(日)

第9回日本車椅子競技大会（和歌山県・和歌山市）

HANDBALL　CONTENTS　Nov.

（登録チームの購読料は登録料に含む）

(財)日本ハンドボール協会編　『ハンドボール』　第五二三号

昭和四十年六月七日
第三種郵便物認可

平成二十三年十月二十六日印刷
平成二十三年十一月一日発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話　代表〇三―三四八一―二三六一
振替　〇〇一二〇―七―一〇二九三

編集兼発行人　川上憲太

定価　年間三三〇〇円